世界の守護者？・・・・・いや修正者です

SUMI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界の守護者？・・・・・いや修正者です

【Ｎコード】
Ｎ２４１０Ｎ

【作者名】
ＳＵＭＩ

【あらすじ】
世界の守護者、いや修正者として呼ばれた男ハザマ、
そしたら世界さんに世界が壊れそうなんで、直してくれと頼まれたので
いろんな世界でチートな介入者やらをもはやチートを通り越した力でフルボッコにする。そんな物語。ちなみにある世界で転生しています。
処女作、主人公最強（一部例外）、不定期更新で不快に感じる人はお勧めできません。

もはやテンプレ言う名のプロローグ

俺の名は狭間　啓太。ちょうど二十歳でニートまっさかりです

いきなりなんだが俺は今、俗に言うポルナレフ状態になっていた。

「あ・・・ありのまま　今　起こったことを話すぜ！

普段通りに部屋で寝たんだが。そして起きたらいつもの天井じゃなくて、なんか青い空間に居た。

な・・・何を言っているのか　わからねーと思うが俺もなにが起きたかわかなかった

催眠ｚｙ『なにを言っている』・・・

あ・・・ありのまま　今　起こったことを話すぜ！

俺の前にいきなり青い人ｇ『いい加減に落ち着きなさい』・・・」

・・・・・・・・・・・

「落ち着きました、であなたは誰ですか？」

なんか人がいるのですが、姿はなぜかピントがぼやけたみたいに

よくわからないが人であることだけはわかる

『落ち着くの速いですね、私の名はあなたの知識で言う世界、

または創作の中で言う根源と呼ばれるものです。』

「二次創作で言う神とかですか。」

なんかｓｓっぽくなってきたなー

『あなたが思い描いているのより上位の存在でありますが。』

「それでその世界とやらが俺に何の用があってここに呼んだ？」

すると、世界は頭を下げた。

「なんで頭をさげる？」

いきなり謝られるのを疑問に思った。

『まず、あなたに謝らければいけません。』

「なんで？」

『私の勝手であなたを都合のいい道具のようにしてしまうことです。』

？？意味がわからない？

「それってどうゆうことなんだ？」

そしたら世界は答えた。

『私の中にいる神と呼ばれるものが、物語の世界へ好き勝手に転生者を送り込みその世界を歪めているのです、このままだとその世界が歪みで崩壊してしまう、それを防ぐためにあなたを抑止力にしてしまうのです。』

「えーと、それって・・・」

Ｆａｔｅの弓兵の様なのになってしまうのか？

『それ心配はありません。簡潔にいえば私が必要に応じて依頼しますので、あなたはどこかの世界でのんびりと過ごしていればいいのです。それと依頼の時には私が支援しますので私に匹敵する存在がでない限り万が一とゆうことはありませんので安心してください。』

なんだそんなことか

「それで依頼の内容は？」

『簡単にいえば、転生者や介入者の始末などや物語の修正、又はなんらかのアクシデントで転生や介入してしまった者の手伝いなどです。そして、ついでに言えば、数人始末するだけで充分です。

私が世界を直す際にその世界の修正力を増幅させて直すので数人だけで充分です』

「受けるしか選択肢がないがおもしろそうだから受けていいよ。」

『そんなに簡単に同意していいのですか？』

そんな世界の言葉に

「このまま普通に過ごすよりつまんないし、こっちの方がおもしろくなりそうだったから、それにあんた

は異世界とはいえ俺の生活を保障てくれるんでしょ？」

『そうですが・・・』

「だったらいいじゃないか、おもしろければ。あ、あと住む世界は魔法とかある世界でお願い。」

『わかりました。あと、住む世界はあなたの知らない物語の世界にします、やはり未来を知るとゆうこと

はつまらないことですから。』

まあ、先がわからないからこそ楽しいとゆうことには同意見だな

『それとお詫びとしてあなたの希望した能力などを付けます。』

マジか、それならば・・・・・・

「だったら、ＢＬＡＺＢＬＵＥに出てくる「蒼の目」ってできる？」

あれ好きな事象一（出来事）好きに観測できるから、出来たら確実にご都合展開にできますし

ていゆうかあれ、下手すると月姫の真祖やタイプ・マアキュリーですら一方的に倒すこと可能になるし。

『ふむ・・・　申し訳ないがそのようなものはできないのでせめてご都合展開になるよう調整しますので

それでいいですか？』

まあさすがに蒼の目はチートってレベルじゃないもんな・・まあ自分もそんなことにしか使わないけど

「じゃあ次にさっきの作品のキャラの能力とかそれの同時使用も使えるようにできる？

あとハクメンは２０％じゃなくて１００％の力で」

ハクメンって時すら切ること（原作のＣＳ（コンティニアム・シフト）参照）ができるからな

『それは可能です、ついでにユキアネサなどの武具も付けておきます。取り出したいときは念じればでる

よにしておきました。』

ｋｔｋｒこれでチートな厨二病できるｗ

「だったら服装も一緒にお願いできる？」

やっぱ服もセットじゃないとな

『わかりました』

「それと使い魔として黒き獣をお願いしたい。あ、八つ首　―《原作の中でヤマタノオロチのような描写がされてあるのでそう解釈しています》の内一つだけでお願い。」

『わかりました。では』

すると目の前に黒い体に鋭く真っ赤な目と歯を持つ肉食獣の様な顔と蛇のような体を持つ獣が現れた。

「・・・これ実際に見ると地味に怖いな」

すろと黒き獣は狭間を見ると嬉しそうによって来た

「しかもこいつ意外に人懐っこいな・・・・なんかこいつのことがかわいくなってきた」

そう言いながら黒き獣の頭をなでてやると、喜んでくれたようだ

「あ・・・やべ、そういえばこいつ・・・」

そういやこいつ見境なく襲うって設定だったな。

『その心配はありません。そのような衝動は消してありますし、あなたの命令を聞くように調整してある

ので安心してください。呼び出す時は念じるか呼べば応じてくてます。それに基本は

空気中にある魔力などのエネルギーを食べて生活するので人が死ぬようなことはありませんが、

あなたの命令一つで全て喰らってしまおうとしますので注意してださい。』

うわ・・・これは命令を出すとき気を付けなければいけないな

「そして研究すればいろんな道具を作れる学者としての能力もお願いできるかな？

・・最高で5年でできるようにしてもらる？」

準備してもし過ぎることはないからな

『それだと時を止めるほどのものは5年は無理ですが7年でできるのでそれでいいですか？』

「それでいいです。」

苦労して作るからいいじゃないか。それが物づくりの喜びですから。

「次に姿はＢＬＡＺＢＬＵＥのラグナとジンを足して二で割った感じで髪はラグナで目はジンでお願い。

追加で寿命は１０００年位で。」

原作でも兄弟だし、顔の造形も似てるからな

『それでは。』

すると俺はの姿は身長１８２ｃｍとどちらかと言えば優男にはいるであろう顔と白髪とも銀髪とも取れる髪になった。

「おおー」

どうやら声はラグナ―（ＣＶ杉〇智〇）を優しくした感じになっていた

「それと修行の時間を１０年ほどもらえないかな？」

経験なきゃいくら地力が強くても結局は雑魚にしかならんしね

『では大きな出来事の１０年前、原作では３０年前に送ります。』

「最後に一番重要なことでその世界での自分の強さや潜在魔力とかは最強と同等かそれよりちょっと強い

程度にしてもらいたいのだけど。いいかな？」

これだけはちょっと譲れない願いだ

『何故そんなことを？』

「やっぱ強すぎると独りになったりするんでちょっとさびしいですし、これからその世界に住む一員にな

るのであまりに強すぎると自分が神を気取るかもしれないから。それに暴走しようとしたら自分を殴って
止めてくれる対等な友人も欲しいからだ。・・・それとチートな強さは依頼の時に堪能させてもらいます
よ。」
やっぱり寂しいのは嫌いです。
『・・・・わかりました、そのように調整します。』
「ありがとう、これで願いは以上だ」
『わかりました、では人の来ない森の奥地に送りますがいいですか？』
「それでいいよ。」
すると足元に魔方陣のようなものが現れて光り始めた。
「さて新しい人生の始まりといきますか。」
俺のそんな言葉に世界は
『いってらっしゃい』
といい、俺は気を失った。

もはやテンプレ言う名のプロローグ（後書き）

これからハザマはネギまの世界の一員となります。
この世界だけハザマは最強に近いが全てにおいてのとは違いますだけど他の世界だとチートとかバグとかを通り越していますのでチートもって調子のっている介入者をフルボッコです。
こんごともよろしくお願いします

本編　第一話　ただいま修行中（前書き）

お気に入り登録してくださってありがとうございます
これからもこの小説をよろしくお願いします

本編　第一話　ただいま修行中

「セイ！ハッ！ズェア！」

いきなりなんだが俺はここに着いてからもう7年は修行をしている。今はハクメンの戦闘技術を使っている

のだが、本気でやるとマジでやばかった。何故と言われるとまず本気で雪風したら世界が切れた。振り向い

た時にちょっとだけなんだがさっきまでの自分が見えたりしたよ。英雄の名は伊達じゃないってわかった

よ。それとハクメンのあの鎧についてなんだがあれって見えなさそうでちゃんと見えた、見えるように術式

やらなんやら入れてあるかもしれない。それに他の人も地味にすごいことも判明した。まずν（ニュー）－１３－

とλ（ラムダ）－１１－のソードサマナーなんだがＦａｔｅの王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）

や無限の剣製（アンミリデット・ブレイド・ワークス）にも勝るとも劣らない威力と数量の剣を出せるし、

ハザマのウロボロスは5本位いっきにでた。ジンのユキアネサだって試しに湖で煉獄氷夜やったら

一瞬で全部凍ったよ。マジぱねぇ。

次にそれぞれのキャラによって戦い方が違うこともわかった。ラグナはガン攻めでジンは堅実、<ｒｕｂｙ><ｒｂ>ν－１３－<／ｒｂ><ｒｐ>（<／ｒｐ><ｒｔ>ニュー<／ｒｔ><ｒｐ>）<／ｒｐ><／ｒｕｂｙ>とλ（ラムダ）－１１－は慎重に戦うタイプだったし、ハクメンは待ちで返しの技術がものすごかった。

人それぞれの個性ある戦い方が多く大変でしたよ。

最後に重要なことでラグナとハザマの「蒼（ブレイブルー）（碧）の魔導書」とソウルイーターについてはどうやら生命力ではなく魔力を吸収する仕様になっているようだ。ラグナとソウルイーターの場合は吸収できる範囲は少なくとも体か武器に触れないといけないが吸収できる量は多いのでこれは１対１の戦いに向いている。一方ハザマの方は一定の範囲内を吸収できるが一度に吸収できる量はすくないのだが吸収できる魔力の総量は此方が上なので広範囲殲滅系の攻撃や殲滅戦向きになっている。

まあ、どちらも強いから問題無いのだが。

「これで終いにするか。」

えっ？口調が違う？どうやらその人物の格好をすると口調まで変わってしまうみたいなんです。バングはゴ

ザルだったり、ハザマのときは初めは丁寧な口調だったのだがテンションがあがるとヒャッハーとかいいま

くって蛟竜烈華斬撃（みずちれっかざん）ちまくっていたよ。ええ、世紀末暴徒（せいきまつぼうと）のように。

あ、それと使い魔として着いてきた黒き獣なんだけど、なんとゆうか、そいつは今近くで日向ぼっこしてい

ます。こいつ怖い顔しておきながら根はおとなしく人懐っこい性格でなでると喜んでくれるんでそのギャッ

プがかわいいです。だって、夜寝てると黒き獣が寂しそうにこっちにすりよって来るんですよ

怖い顔しながら子供のような純粋な目で見るのもかわいいです。

しかも餌はそこらにある魔力で充分なので手がかからないのもいいです。それに体の大きさ

は自由に伸縮できるようで今は小さくなっている。どうやらこっちの方が燃費がいいみたいだ。それに

いつでもどこでもすぐに呼び出せるから問題ない。

いろいろと修行してそれぞれの基本的な戦闘技術は最適化できたし。人を殺すとこもした。ここに流れて

きた盗賊が襲ってきたのでそれを防ぐためにね・・・・・・・

かなりきつかったよ。そのおかげで人を殺す覚悟もできた、あとは実戦を経験するだけ、もうそろそろ来る

かな。

すると目の前に手紙が現れた。

「やっぱりか・・・・さて依頼の内容はと。」

依頼の内容はこうだ、まず世界は「魔法少女リリカルなのは」と呼ばれる世界で始末する相手はプレシア・

テスタロッサの元にいるとのこと。プレシアは実の娘を失い、蘇生させるために狂気へ走り、それの途中で

フェイトとゆう実の娘のクローン作り出したのだが、プレシアは彼女を人形といい、痛めつけていた。ま

あ、結局は自分が集めていた「ジュエルシート」なるものによって自滅しておわった。

さて、次が問題だ。その近く転生したものがいる。どうやらそいつは変態らしく、フェイトを手に入れるた

めにプレシアに近づいたらしい。さらにＰＴ事件と呼ばれる出来事を利用して高町なのはと呼ばれる人物も自

分のものにしようとしているみたいだ。俺の仕事はそいつの抹殺っ

てところ。

しかもやっかいなことにそいつは未来を知っている（原作知識）ことと、神の加護―（下級神でも大抵のことは

実現できる）があって、神を気取っているらしい。

世界に抹殺対象にされるなんてどんな馬鹿なことやってんだ・・・・

世界の基準がまったくわからん。でも一つだけ判ることがある。このままでは世界がヤバイことだけ。

こんな輩が増えているから俺のような始末人が出来てしまったのだから。

それは置いといて、そいつの能力は・・・・・・・王の財宝（ゲート・オブ・バビロアンミ）と無限の剣製（リデット・ブレイド・ワークス）にあっちの世界基準で魔力ＳＳＳか・・・・

「もはや王の財宝（ゲート・オブ・バビロアンミ）と無限の剣製（リデット・ブレイド・ワークス）は

定番になっているな」

汎用性高いからな・・・・似たようなことできる自分が言えることじゃないけどなｗ

「追加でもう一人の転生者がいるので手助けとしてあるものを渡して欲しいか・・・ってこれ

まんま『蒼の魔導書（ブレイブルー）』じゃないか」

そう言って現れたのは、右手の形をした武器で色は暗めの黄色で手の甲には
丸い蓋らしきものがついていた。さらに調べるとソウルイーターまでついていた。
まあ、それはそれとして・・・・姿をラグナに変更。
黒いインナーに黒い袴にベルト、赤いジャケットに変わった。
「さてとっ・・・行きますか・・・・ってどういけばいいんだ?」
そう思った瞬間、手にトランプほどの大きさのカードが現れ、それに合わせて扉があらわれた。
「これが鍵なのか。今度こそ行くか。」
そうして扉をくぐった。

本編　第一話　ただいま修行中（後書き）

とゆうことで本編より先に依頼をします
これが終わったら本編に入ります
その他感想にて依頼で行って欲しい作品やら希望がありましたら
作者次第ですが受付します

依頼編　第一話　主人公みたいにできる人ってほんの一握りだけだよな（前書き

今回は調子に乗った介入者のプライドをぼっきぼきする話です
本編とは違い、依頼で他の世界にいっているハザマはチートで最強
なので
好きではない人はブラウザの戻るを推奨します

依頼編　第一話　主人公みたいにできる人ってほんの一握りだけだよな

ーハザマ　ｓｉｄｅー

ゲートから出た瞬間、街燈が作る夜景と海が目に入った。

どうやら、人気のない山の方に出たらしい。

さて、やって来ました鳴海市に、ここではおいしい喫茶店があるみたいだから。仕事の後に行きますかな。

さっさと仕事を終わらすため、索敵する。

「さてとターゲットはっと・・・・・ちょうどよく一人になっているな、おおかた最低なことするため、

馬鹿なこと仕掛けているのだろうが、まあいい、こっちには好都合だし。

さて、さっさとやっちまうか。」

そうして俺は移動した

l？？？？sidel

フフフ。これが仕掛ければなのはたんも手に入れることができる。
フフフ・・・

僕はこの世界で神だ、全て僕の思い通りになる、なんせ神だからね。
なのはたんもフェイトたんもはやてたんも全て僕がどのように生きるのか決め、僕に服従しなければいけないのだよ。

フフフフフ・・・・・・・・・・・・・・・

目が覚めたら神を名のるおっさんがいて、なのはの世界行って原作ブレイクして来いって言われて、

能力もらった。

半信半疑だったがここにきてから確信した。間違いなくここはリリカルなのはの世界ってことを。
フェイトたんを自分のものにするため、プレシアに近づいた。アリシアを蘇らせる方法を教える代わりに
フェイトたんを僕の好きに出来る契約もした。

さて、少し仕掛けをしよう。

僕が圧倒的な力を見せ付ければなのはたんも僕に従わざるをえなくなるだろう。

まあ、こんなことしなくても僕の力があれば簡単なんだけど、より圧倒的にするためだ。

この世界を自分の好きなように出来るのだから笑いが止まらん。

グフフ「ここにいたか」h・・・・チッ、僕の邪魔をするアホな奴が来たか。

イライラする、絶対的な力を僕に逆らうこと自体あってはいけないことだ。

僕は神だ、僕に逆らうことは神に逆らうこと同じなのだ。そんな愚か者には制裁をくれてやる。

「貴様は何者だ?我の邪魔をするならば消すぞ。」

そう言って、王の財宝(ゲート・オブ・バビロン)から数本、剣を出した。

ーハザマｓｉｄｅー

「貴様は何者だ？」

・・・・いきなり脅すのかよ。まあいい、どうせこいつは始末するんだし。

そう思って、俺はセラミックの大剣に手をかけようとした瞬間、剣が飛んできた。

「やれやれ、いきなりかよ・・・まあこっちの方がはやくていいか。」

そう言いながら、それを避ける。

そうすると、相手はいらだったのか、倍の数の剣が飛んできた。それをソードサマナーで迎撃する。

ーーーーーガガガガガガキンッーーーーー

まるで戦のように何十もの剣と剣が撃ちあった音をだして、それぞれの剣は、落ちていった。

（・・・やっぱり、あっちに居るときと調子が違う。）

やはり自分自身の力が違う。俺はこれが世界の援護なのだと納得す

る。

先ほどのきっかけに戦いは加速していった。

相手と俺が、王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）とソードサマナーで互いを打ち落としつつ、俺は

手に持った大剣で斬ろうするところに、相手の魔法がそれを阻止するといったことを繰り返した。

ｌ？？？？ｓｉｄｅｌ

くそっ！くそっ！！なんで！なんで倒れないんだ！！！

僕は最強なんだ！！僕が押されることも！負けることもありえないんだ！！

くそっ！！！

「なんで倒れないんだよ！僕はここでは最強なんだ！！なんで、なんで僕の思い通りにならないんだ！！！」

そういいながら、撃った魔法は相手が赤黒い霧のようなものを纏った右手で払った瞬間、

ーーーーーースッーーーーー

……最初からなかったかのように消えた。

ふざけるな！僕は選ばれたんだ！！この世界を好きに出来る人間なんだ！！！

なんで僕の邪魔をするんだ！僕は神なんだ！僕の逆らうことは愚かなことなんだ！

だが、王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）の剣軍は全て打ち落とされ、魔法は相手が大剣や右手を振

るたびに消されていく。それに苛つき、王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）から打ち出す剣や撃ち出す魔法も太陽剣グラム、

闇の書事件の防衛プログラム戦で主人公が使ったエクセリオンバスターなどいった、

高ランクの宝具や魔法を多様し始めたが、そのことごとくが打ち落とされ、かき消されていった。

いつの間にか、戦況は相手が攻撃し、ハザマがそれを防ぎ往いなすといった状況になっていった。

戦況は拮抗していると思われたが、相手の攻撃が徐々に弱くなり、王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）から打ち出される宝具の数が減りはじめた。

そう、玉切れである、どんなものであろうと使えば消費する、蔵の中の宝具であろうと、魔力であろうと

使えば、いづれは底をつく、この戦いもそうなったのである。

くそっ！！！くそっ！！！！くそっ！！！！！くそっ！！！！！！！

なんで？なんでこいつは倒れないんだ？最強の僕が攻撃して倒れないなんて。ふざけるな！！！

僕と戦えば負けるのが当たり前なんだろうに、なんで倒れないんだ！

「調子こいてんじゃねえよ、馬鹿が」

馬鹿？この僕が馬鹿だと？　ふざけるな！！

僕は最強なんだ！！！僕が戦えば勝つのは当たり前なんだ！！」

いつの間にか声に出てたのか、相手はこう言った。

「最強？なら、倒してみせろよ。」

「やってやるよ！！来い、乖離剣（エア）！」

そうして僕は最強の剣を出し、この攻撃で相手の顔を歪ませてやる、と力を溜めた。

それに呼応して円筒形の剣が魔力を発しながら回転する。

ああそうさ、この最強の僕が放つ、最強の一撃は避けることも防ぐこともできない。

だから、だから、あのくずの顔を恐怖で歪めてやるさ！！

剣の魔力が最高潮に達し、自身でも最強の一撃を放った。

「喰らえぇぇぇ！天地乖離す開闢の星（エヌマア・エリシュ）！！！」

ーーーーービゥオオオオオオオオ！！！ーーーーー

僕に中に残っている魔力をほとんどこの攻撃に乗せた。

そうして出した、まさに暴風といっていい攻撃をあいつは顔色ひとつ変えずに

「出て来い」

といって、自分の二、三倍の大きさで黒い体に真紅の目と歯を持つの見たことのない使い魔を呼び出した。

その使い魔は天地乖離（エヌマ・エリシュ）す開闢の星を見て、そのまま顎が外れそうな位、口を開け、

ーーーーーガブッ！！ーーーーー

あろうことか天地乖離（エヌマア・エリシュ）す開闢の星をまるごと喰べた。

僕は目の前の光景、いや現実が理解できなかった。言葉すら出なか

った。

だって自分が最強と誇る攻撃を受け止めるどころか、まるで菓子の曲芸食いの様に食べられたのだから

もはや笑うしかない

よく物語でもある、主人公の前に現れ、「最強」や「神」を思い上がり、やがて本当の「最強」を

持っている主人公たちと戦い、そして敗れ、去っていく。どうやら僕はそんな役だったらしい

もはや「僕は最強」や「神」だなんてものは消えた。そう呆然としていると、あいつが近づいてきて

「終わりだ・・・・これはせめてもの慈悲だ」

そう言い、あいつはあの使い魔と同じような真紅の爪を着けた大きく黒くなった右手で僕を?み上げ、

「あばよ」

あいつのそんな声を聞き。

そして、

僕は闇に喰われた

依頼編　第一話　主人公みたいにできる人ってほんの一握りだけだよな（後書き）

黒き獣についての補足、
黒き獣はここでは一点特化型の使い魔になっています
竜のように炎を吐いたり、空を飛んだりはできません。
ないない尽くしですが魔力で構成されたものならば
なんのリスクもなしに食べて、その魔力を自分のものにできます
だから勝つには魔力などといったエネルギーを使わずに
純粋な力で戦いを挑むしかないのです。

依頼編　第二話　与えるだけ与えたら、あとは放置です（前書き）

今回も依頼編です。今回は手助けとなっております。
ハザマの活躍はあまりありません

依頼編　第二話　与えるだけ与えたら、あとは放置です

ーハザマｓｉｄｅー

ズズズ、スッ、パクッ、モクモク

う～む、なかなか美味ですね。ズズズ・・・

えっ？何をしているかって？自分は今、なのはの世界でもちょくちょく出てくる翠屋と呼ばれる喫茶店で

紅茶とケーキを楽しんでいます。さきほど口コミで聞いた通りに美味しいです。モクモク・・

ただいまハザマの格好で居ます。紳士のようなスーツ姿です。アクセサリーとかちょっと付けていますが

オシャレな格好をした、ビジネスマンとして見られていることでしょう。

ズズズ・・・、美味しい紅茶です。おそらく淹れ方がうまいのだろう。

茶葉はそこまで高級品じゃないので値段もリーズナブルです。これは口コミで人気なのもう頷けます。

えっ？なんで翠屋でティータイムをしてるかって？

それはあの介入者を倒したときまで遡る。

戦いが終わったあと、そこにはハザマと戦いの後だけが残っていた。

「これで介入者の件は終わり・・・後は転生者にこれを渡すだけか。」

そうして出したのは暗い黄色の腕の形をしたデバイスと呼ばれるものだった。

そしてこれはＢＬＡＺＢＬＵＥの主人公、ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジの右手を模したものであり、

元は生命力を吸うのだが、これは魔法や魔力を吸う仕様になっており、ソウルイーターはもちろん、

「蒼の魔導書（ブレイブルー）」まで付いている代物であった。それが彼に関わるものだと知るのは後のこと。

だが、ここで一つの問題が。

「・・・・・・・・・・・って、誰に渡せばいいんだ？」

そう、彼は知らなかった。あの手紙には介入者のことは書いてあったが、転生者のことが書かれていなかった。世界さんは意外とうっかりであった。そのとき

『その心配はありません』

頭の中に声が響いて、それに驚いた。

「うおっ！！・・いきなり頭の中に語りかけるな。」

『すいません。ですがこうして話しかけたのは依頼に関する追加の情報を送るためです。』

「わかった。それで追加の情報は？」

『転生者については、名前は岡村勇（おかむらいさむ）　年齢は９歳、実年齢は合わせて２８歳

（享年１９歳）　原作知識あり。現在主人公と友人関係にあり、関係は良好。なのはのことを知っている

のに何もできないことの悔しさで力を欲している。　そんなところだ。』

さっきの介入者と違ってしっかりしてるな

「わかった。で、いつどのようにして渡せばいいんだ？」

『そのことについては明後日にことが起きますので詳しいことはそのときに連絡します。これを渡します

ので、それまでここで観光でもしてください。』

そうして出たのはお金であった。その額三十万。しかもこの世界の身分証付き。

世界さんはいろいろと気が回る人であった

「わかった。あ、あと次からいきなり話しかけるじゃなくて電話みたい呼び出してくれないか？」

毎回驚くのは勘弁です。

『わかりました。次からそのように変えます。』

「ありがと。」

『では明後日に連絡します。』

とまあ、こんな流れで明日までやることないのでここでお茶を楽しんでいるのです。ズズズ・・・・

それにここでウェイターをやっている依頼の転生者も見ることが出来ましたし。

物語の世界とわかっていてもそれに捕らわれずにちゃんと話して、本当に助けになりたいと思っているようだ。何故わかるかって？そこは秘密ですよ。

・・・・・・・む？なにやら店員さんがなにやら話していますね。なになに・・・・・・

どうやらこの店がスポンサーになっている小学生のサッカークラブの試合が明日あるようで。

明日は臨時の休業または貸切になるそうです。
運がよかったです。明日では来れませんから。では紅茶も堪能しましたし・・・・
「あのー、すいません。お会計をお願いします。」

ーなのはｓｉｄｅー

なにか変な感じがしたの。今はおうちのお手伝いでウェイトレスをやっていたんだけど・・・・
お客さんの中になにかとても変な感じなひとがいたの。

なんてゆうか、こう、暖かいような冷たいような。なにかもやもやした、よくわからない感じだったの。

それで若いのに白い髪の毛だったからのもあって、わたしの頭から妙に残ってたの。

なんでだろう？・・・「お～い、なのは～こっちも手伝ってくれー」

あ、勇(いさむ)くんが呼んでる、行かなくちゃ。

そして次の日

ーハザマsideー

「よっ」

ーーーーーズガッ！ーーーーーー

「ほっ」

ーーーーーードドドッ！ーーーーーー

「おっとととと」

ーーーーーズドンッ！ーーーーー

突然ですが私は今、巨大化した樹の根っことハザマＶＳレイチェルのイントロのごとく避けてます。

えっ？また場面が跳んでるって？そんなものですよ。

翠屋のこと以外、他のこと話したって面白くもなんともないですから。

世界さんから連絡が来て、行ってみたらものすごい勢いで伸びてる樹が襲ってきたんですよ。

それを避けてたところです。ん？おや・・・・

ＰｉＰｉＰｉ・・・・・ピ、ハイ、こちらハザマ、・・・・・・・・

了解、では。ピ

さて彼が樹に取り込まれているらしいですね。原作知識を持っているためですかね。

位置も教えて貰ったし、では

「伸びろ！」

ウロボロスを目標の近くに伸ばす。

ーーーーージャララララ・・・・・ガブッ！ーーーーーー

先端に付いている蛇が噛んだの見ると

「蓬閃（ほうせん）・壱（いち）」

さきほどの巻き戻しのように鎖を戻す勢いで素早く目標の近くにする。

だが、彼の勢いが無くなるとき、樹もそれを狙ったかのように彼の身長もある枝で薙ぎ払おうとするが

「飛鎌突（ひれんとつ）！！」

ーーーーーバギィ！！ーーーーー

その場で回転しながら暗緑色の魔力を纏った踵落としで叩き折った。
折った枝と共に目標の近くの足場に降り立つ。
「さて、彼はこの下ですか・・・・・・さてと・・・・残影牙(ざんえいが)！」
魔力を纏ったナイフで掬い取るように地面を抉る。そうして出来た穴に飛び降りた。

ｌ勇ｓｉｄｅｌ

気が付くと真っ暗だった。どうやらおれはジュエルシードで暴走した樹に飲み込まれたんだろう。
なのはを助けようとして来たらこのざまだ。

ここがリリカルなのはの世界だと知ったのは三年前。
当時、転生したことに戸惑っていた俺は海鳴市に引越ししたことでさらに戸惑い、孤立していった。
そんな中、俺に話しかけてくれたのはなのはだった。
彼女のおかげで俺は他のみんなと仲良くなれた。俺もなのはが困ったら助けたいと思った。
それは「主人公に接触すれば甘い汁をすえる」とかではなくただ純粋に「高町なのは」を助けたいから。
だが俺には力が無かった。ユーノの念話は聞こえたから、魔法の素質はあるのだが魔法は使えない
その補助をするデバイスだって持っていない。ないならないなりに手伝おうとしたが、
魔法が使えない＝魔力探査が出来ないから現場に行けなかった。
そして今日こそはと思ったらこのざまだった。
今ほど力がないのは悔しいと思った。手伝おうとして足手まといになる、手伝うことすら許されない。
悔しかった。力が欲しかった。そんなとき声がした「力が欲しいか？」と、もちろんこう答えた。

「ああ・・・・・力が欲しい！！」

「じゃあ聞くが、何のために力を求める？」

そんなの決まっている！！

「大切なひとを手助け、守るためだ！！！」

あいつはその答えに満足したのかすこし笑ったように

「いいぜ・・・・気に入った。これをくれてやろう。デバイスと呼ばれるものだ。」

そうして見せたのは腕の形をしたデバイスだった。

「だがこいつを使うには条件がある・・・・それは右腕と犠牲にすることだ。幸い一般人には自動で

幻覚または認識阻害魔法がかかり、普通の腕に見えるが魔導師には効かない。だが安心しろ、

こいつは所持者または周囲の魔力を吸収して修復するから問題ない、たとえ消えようが再生する。

それにそっちの成長に合わせてくれるし義手として機能もある。だが自分自身の体の一部を捨てるとき

想像を絶する痛みがくるがいいか？」

あいつの言葉に俺は決意を込めて、あいつを見る。闇に目が慣れた

のか、あいつの姿うっすらとみえてきた

黒のスーツに白い髪が映えていた。あいつはそんな俺の目を見ると満足そうに頷いて。

「わかった・・・・かなりきついぞ。」

あいつはそういって俺の右腕を肩口から切り落とした

「!?!?!?!?!?!?!?!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

右肩から言葉では表現できない痛みを通り越した、もはや熱いとしか感じなくなっているとき

あいつはデバイスの接続面を傷口に”グチャ”とするほど押しこんだ

「ーーー」

俺は言葉にも叫びにも聞こえない声を上げた。

するとデバイスから黒い霧が出て、俺を包むように纏い、熱さが増していく。

まるで右腕を溶岩に突っ込ませたくらいの熱さを感じながら気を失ってしまった。

依頼編　第二話　与えるだけ与えたら、あとは放置です（後書き）

とゆうことで力を手に入れる代わりに右腕を代償にしてしまいました
とゆうかなんのリスクもなしに力を手に入れるなんてありえないと
作者は思っています。ハザマは力を手に入れる代わりに
この仕事をしていますから。ハガレンの等価交換と同じようだと思
っています

ついでにハザマについて補足
これからいろんな格好とキャラの性能で戦いますが
なぜかといわれれば、簡単に言えばノリに近いものです
ハザマはどんな格好であろうと全てのキャラの戦いができます
例レイチェルの格好でテイガーのＧＥＴＢ
ジンの格好でラグナの戦い方も可能ですので
今着ている服のキャラで戦い方を変えても問題ないです
だから彼はいろんな格好で戦っています
感想でリクエストも受け付けています
ただし依頼の時にしか反映できません

依頼編　第三話　リリカルなのは　きっかけを与えるのが仕事です（前書き）

今回はなのは世界におけるオリ主の活躍オンリーです

ハザマさんは今回出番なしです

それとタイトルを本編と依頼編に分けました。

依頼編　第三話　リリカルなのは　きっかけを与えるのが仕事です

ｌ勇ｓｉｄｅｌ

「う・・・・あ。」

気が付くと、そこにあいつの姿はなく、夢かと思ったが右手が自分のではなくなった

どうやら夢ではなくデバイスに変えたことは現実のようだ。時間もそんなに経ってない。

しかし、驚くことにこのデバイスは義手として高性能であり、なにより触覚が正常に機能した。

ただ痛覚がほとんど無くなっていた。だが後悔はしていない。この右手なら問題ない

それよりもこれがどんなことができるのか確認しなければ。

「聞こえるか？」

おれは右腕に話しかける、すると

『聞こえています』

手の甲にある蓋らしきものから聞こえてきた。

「なら・・・俺の名が岡村　勇だ。これから長い付き合いになるからよろしく」

『よろしくお願いします、マスター。私の名は「ハーデス」です。マスターの右腕になったことにより

私の固定能力をマスターの能力として使用可能になりました。』

なんと嬉しい誤算だ。

「それでその能力は？」

『名称「ソウルイーター」　詳細は周囲や相手の魔力や魔法を吸収して自らのものできる能力です。

ただし条件があります。』

すると右手が黒い霧のようなものに包まれる。

『このように今、右手に纏っているもので触れなければいけません。』

（かなり便利な能力だ。しかも自分の固定能力になっているのも高い、この霧みたいのしか吸収できない

のはそれほどきつい制限でもない。とゆうか右腕を切ってまでやったかいありだ。あいつもいいデバイス

をくれたもんだ。ここは感謝するよ）

『では右手を払ってください』

「？　こうか？」

ーーーーーゴォ！ーーーーーー

すると腕から半径二メートルにわたって黒い霧がなぎ払った。

『こうして、霧を操ってなぎ払うことも可能です。』

「なるほど・・・・で、他にはなにがある？」

『それについては直接転送します。』

そうして頭の中に情報が流れ込んできた。

「・・・・使えるのはさっきのと、バリアジャケットか・・・・・・・なんで今のようにしなかた？」

最初の時に転送すればいいじゃないのか？

『直前までマスターとの接続がうまくいってなかったためです。』

「どうゆうことなんだ？」

『私とマスターは文字通り一心同体ですので神経のようなリンクがあるのです。さっきのはそれの調整

するためです。それも完了しました。命令を、マスター』

「・・・・・なら、バリアジャケット展開」

『了解、「ハーデス」セットアップします。』

そして黒き衣装に包まれる、インナーに袴の和洋折衷のデザインに変わる。手も同様に黒き手袋が

装着される。そして、その姿はまさに「死神」と呼ばれるような格好だった。

「さあ、いくぞハーデス」

『了解、「ソウルイーター」、出力上昇』

俺は外に出るために、そして邪魔なものを払うように樹をなぎ払った。

ーなのはｓｉｄｅー

ジュエルシードが発動するの感じて、ユーノ君と来てみたら大きな樹が街を壊していたの。

それを見て私は自分の甘えを知った。ただお手伝いする程度と思っていたのだから。

そう思い、封印をしようとしたとき

ーーーーードゴォォォンーーーーー

まるで内側から爆発したように樹は弾けて、そこから黒い服を着た人が現れたの。

それをユーノ君が

「魔力反応！なのは、あの人も魔導師だよ！！」

それを聞いてビックリした。私と同じ魔導師がいることに

それよりもその魔導師が勇君であったことに。

そんな出来事に私は唖然となっていた。

そして私は勇君に向かってくるの枝に

「あ、危ない！勇君！！」

私は声を出すしかできなかった、しかし、勇君は

「ハーデス、薙ぎ払え」

『了解、ヘルズファング』

ーーーーーバギャッ！ーーーーー

そんな声を聞き、黒い霧を纏った右手で向かってきた枝を薙ぎ払い、私のところに降りてきた。

「な、なんで勇君がこんなところに！？」

「くわしい話や経緯は後だ。そんなことよりあの樹を止めるぞ。ほっとくと被害が大きくなる。

なのは、大本の位置は判るか？」

「え？ああ、うん。大体の位置はわかっているからあとは封印するだけだよ。」

「わかった。俺が守るから、なのはは封印に集中して。」

そういったところに、ユーノ君は

「ちょっと待って！そのまえに君のデバイスはどんななんだい？」

あ・・・そうか、前にユーノ君が言ってた魔導師にはデバイスを必ず持っているっていったけ。

「わかった・・・・ハーデス」

『了解、バリアジャケット限定解除』

すると勇君のバリアジャケットが右腕だけ解除された。

それは肩まである暗い黄色の腕だった

「これが俺のデバイスのハーデスだ」

『ハーデスです。よろしくお願いします。』

『私はレイジングハートです＞よろしくお願いします。ハーデス』

いつの間にかデバイス同士で挨拶していた・・・・

「次に君の戦い方はどんな風に戦うんだい？」

ユーノ君がもう一つ聞いてきた。

「俺は今はバリアジャケットと固定能力による接近戦しかできない。」

「稀少能力(レアスキル)だって！？」

そう言ってユーノ君は驚いていた。稀少能力(レアスキル)ってなんだろう。

「ユーノ君、稀少能力(レアスキル)ってなに？」

「なのは、そ「そんなこと話す時間はもうないようだぞ」れ・・・」

ーーーーーゴオッーーーーー

すると枝が落ちてきた。どうやら勇君が落としてくれたようなの。

「詳しいことはこのことが終わってからだ。なのは、さっき言ったようにジュエルシードの封印を頼む」

「わかったけど、なんで勇君がジュエルシードのことを知っているの？」

「それも後だ！いまは封印頼む！」

ーーーーーバキ！！バギャ！！ーーーーー

勇君はそう言って私に向かってくる枝黒い霧で落としている。

今はジュエルシードを封印することに集中しなくちゃ。

「レイジングハート、シーリング・モード、お願い」

『シーリング・モード、セットアップ』

「行って！捕まえて！」

すると桃色の閃光が伸び、ジュエルシードを捕まえる。

『スタンバイ・レディ』

「リリカル！マジカル！ジュエルシード、シリアル？！封印！！」

さきほどより強力な閃光がジュエルシードへ伸びていき。

ーーーーーバシュウ！！ーーーーー

その後、強烈な桃色の光が起き、光が消えたときには巨大な樹も消えていた。

ーハザマｓｉｄｅー

「これで任務完了ですかね。」

私はこの光景を見ていました。自分が送ったものがちゃんと役に立っているかと

勇の腕のことを知ったことに一波乱あろうけど。

「これでこの世界はちゃんと機能する、リリカルなのはと呼ばれる世界が。」

そう、世界は河に似ている。源流があり、そこから細かく枝分かれをし流れていく。

それがどんな世界であろうと分かれ流れていく。物語だろうとなんだろうと

流れは運命と似ている。水が上から下へ落ちるように、一点に収束する。だがそのなかにいるものたちが

それを変えようと抗うから、別の流れが出来る。それはとても喜ばしいことだ。新たな流れを創り

それを流れることとは、運命に勝つことを意味するのだから。

それだからこそ、無限ともいえる数の世界ができる。

ただ最近「神」と呼ばれるものが好き勝手に流れを作っている。

ちゃんと流れるのなら問題ないが、最近は流れを止めたりとあまりに勝手にやりすぎている

流れを止めると。それでは洪水が起き、世界が混ざってしまう。それは世界の消失を意味してしまう。

もちろん、その後の可能性も消えてしまうのだから。

私の役目はいわば整備員ですかね。なんらかの理由で混ざってしまったものを馴染ませたり、

流れを塞き止めたりするものを取り除いて正常な流れに戻すなどをする。

そしてこの世界の修正は終わったともいえる。そう、また「神」などの介入がなければ。

それが無ければこの世界は流れていく。ただ、どんな流れになるかはわからない。

原作のようにすこし悲しいハッピーエンドになるか、みんなが助かる最高ハッピーエンドになるか

最悪のバットエンドになるかはわからない。

ただ私は見守るだけ。この世界に生きるものたちが生きるさまを
原作(みらい)知識を知っているからこそ、よりよい未来を得ようとあがくこと
が
それが綺麗だと美しいものだと思った。それこそ、世界が守ろうと
したのがわかるくらい
だからこそ、都合のよいように流れを変えて、好きに変えようとす
ることを阻止しようと思った。
そして、自分が住む世界の一員であろうと、この仕事の誇りを持つ
とともに
私は門を潜りこの世界から去った。

依頼編　第三話　リリカルなのは　きっかけを与えるのが仕事です（後書き）

とゆうわけでリリカルなのはの依頼は終了

次は本編に行きます。殴りあいます。それでは

本編　第二話　こんなのが最強じゃチートなるのも納得だ（前書き）

どうも作者のＳＵＭＩです
今回は戦闘オンリーなってしまいました
作者の力不足ですいません

本編　第二話　こんなのが最強じゃチートなるのも納得だ

ーハザマｓｉｄｅー

ーーーーガシッ！ーーーーー

「捕まえたぞ！」

相手を？み、一回転して遥か上空へ打ち上げる

ーーーーブオォ！ーーーーー

「祈りは済んだか？」

それを越すスピードで追いかけ再度相手を？み、今度は落下していく

ーーーーゴゴゴゴ！ーーーーー

「貴様はここで」

そんな音と共に空気との摩擦で周りが赤くなっていく。だが落ちる速さが増していく。

そして落ちる直前で相手を

「終わりだ！！！」

ーーーーードゴオォン！！！！！ーーーーー

全体重を乗せて叩き付けた。

その衝撃で叩き付けた地面は１０ｍは陥没し、周りの地面が円状に波立つ

「ガハァ・・・・・・・・・ゴホッ、ゴホッ・・・・・・・・・ゲホッ、

かなりきいた一撃だったぜ、やるな、お面野郎。」

相手、ジャック・ラカンはそう言って立ち上がった。・・・あ、今はハクメンの格好です。

なんで戦っているかって？

修行として旅に出て行って、荒野を歩いていたらいきなり喧嘩売られたんで買ったんです。

その過程は割愛します。

それは置いといて、この人チートだろ。自分もだが。

いくらなんでも地面との磁力（超伝導）＋重力＋風の勢い（全開）
＋１００ｍ以上の高度＋
テイガークラスの体重＋ハクメンの腕力によるＧＥＴＢ（ジェネシック・エメラルド・テイガー・バスター）を受けて吐血する程度とか。割りと本気の一撃なんだ、あれ耐久力バグが起きてるかと・・・・・・・・・って自分も其れ位あることに気づいて軽く凹んだ。
それも置いといて、戦闘を続ける。
「へっ、楽しくなってきたぜ！！こっからは遠慮なしで全力でいくぜ！！！
来たれ、『千の顔を持つ英雄』！」
ラカンの周りに剣、槍、ハンマーなどいったさまざまな武器を展開させる。ジャックはそれらを持ち
「おらおらおらおらおらっ！」
自分に向かって投げつけてきた。だが似たことを体験しているのでソードサマナーで冷静に対処する
ーーーーガガガガガガガガガガッ！！ーーーーー

「なかなかやる！！ならこれはどうだ！斬艦剣！！！」

ラカンの何倍もある剣を投げてきた。・・・・・なんでもありだな、自分もだけど。

「残鉄！！」

野太刀の鳴神（おおかみ）を一瞬で大上段に構え、振り落とす！

ーーーーースッーーーーーー

そんな音とともに斬艦剣はまるで豆腐を切るかのよう真っ二つに切れたが、しかし

ーーーーーゴッ！！！ーーーーー

とそんな音と一緒に自分はわき腹と腕あたりに衝撃を感じ、ふっとばされた。

どうやら、斬艦剣は囮らしく、本命はこの攻撃なのだろう。幸い、反射で防御できたのでまだ戦える。

「なかなか、やるな貴様」

「そちらこそ・・・な！」

ラカンはそういいながら、今度は近接戦闘（インファイト）を仕掛けてきた。

ーーーーシュ！ボッ！ボボボッ！ビュオ！ーーーーー

それを自分はただ捌く。ひたすら捌くのみ。

正拳、裏拳、かかと落とし、回し蹴りなどの連撃をひたすら捌く。

戦ってみてわかったことはこいつは熟練者（ベテラン）であることだ。

一見力任せに見えて、その実経験による、隙がない戦いをしているのだ。へたに手を出せば、

カウンターを食らってしまう。だからこその待ち、隙が出来るのを待つ。

「どうした？こんなもんなのか？」

ラカンがそう言って、フックを仕掛ける、そこで隙を見つけたので

「油断はいかんぞ」

ラカンに密着状態から掌底で叩く

ーーーーゴッ！！ーーーーー

「ガッ！」

吹っ飛ばされたラカンは何事もなかったように立ち。

「ククク、こんなに強い奴と戦うのはひさびさだ。最高に楽しいぜ。」

「こちらもだ、まだ私の名を言ってなかったな。名乗らせてもらう。」

そういって鳴神（おおかみ）を正眼に構える。原作やった人ならやりたい厨二病いくぜ

「我が名はハクメン、推して参る！」

その言葉と共に周りの空間が振るえ、兜の裏から出ている髪が九つに分かれながら浮く。

だがそれもすぐに収まる。まあ、ほとんど削ったが。さあ、楽しもうか！

ーラカンｓｉｄｅー

最近相手が弱すぎて、退屈していたところに

つい強そうな奴を見つけて喧嘩を売っちまったんだが。こいつは大当たりだった

なんせあのお面野郎の叩きつけはマジで気合防御しなきゃヤバかった。

一瞬だが意識が飛んじまったし、『千の顔を持つ英雄』が効かないどころか似た手段で対抗してきた

そして名乗りの時の威圧感だ。止められねぇ。極上のごちそうを目の前にしているのと同じだ

本当にこっからが本番か。

「往くぞ！」

なっ！？速い！もう目の前にきてやがる。防御が間に合わん！だが！

「闇魔！」

「やらせるか！」

ーーーーーゴッ！ーーーーー

同時に殴ったために一つの音で二人は吹っ飛ばされた。

そこから

ーーーーーーーーーーーーーーー二時間後ーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーー

「椿祈（ツバキ）！」

空中で回転しながら切りつけるのを

「気合防御！」

腕を交差し、気合防御でそれを防ぐが

ーーーーーボゴッ！ーーーーー

あまりの強さにラカンの足が地面にめり込んだ

だがラカンは地面から無理やり足を引き抜き、膝蹴りを繰り出す

しかし、ハザマは鳴神(おおかみ)で防ぐが、空中であったため勢いを殺しきれず

そのまま離されるが、そのまま様子をみる

――――――――――――――――――――五時間後――――――――――――――――――――

「腹ががら空きだぜ」

「何！？しまった！」

ハザマの腹にラカンの回転がかかった拳が当たる

「羅漢破裏剣掌！」

「グオッ！？」

ーーーーーグルォ！ーーーーー

腹、みぞおちの下あたりを中心に横に回転しながら飛ばされる。

「グッ」

だがハクメンはすぐに立ち上がる

「流石にアレじゃ倒れんか」

ーーーーーーーーーーーーーーーーー八時間後ーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーー

「足元が留守だぞ！」

ラカンが姿勢を低くし足払いを仕掛けるが

「甘いぞ！」

「なに！？」

ハザマは足を上げてかわし、そのまま踏み潰す！

ーーーーーバギィ！ーーーー

ラカンを踏んだ衝撃で地面にひびが入る

ーーーーーーーーーーーーーーーそして十二時間後ーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーー

「はぁ・・はぁ・・・・・そろそろ限界か・・・・こんなに楽しいの初めてだぜ。」

「ああ、そうだな・・・・だがそれもここで終焉だ。」

そんな言葉をだした二人はすでにボロボロだった。

ラカンはところどころに血が出ていて、ハザマは白い鎧が黒く汚れている。

そして周囲は戦闘の余波でもはや地図を書き直さなければいけないほど変化していた。

それがこの戦いの激しさを表していた。

「これで最後だ、デカイの行くぜ」

「いいだろう、なら我も・・・・・・・・・虚空陣(こくうじん)」

ラカンは右手に出来る限りの気をため、ハザマは鳴神(おおかみ)の切っ先を天に向け力を溜める

互いの力の強さのあまりに空気が震える

そして

「ラカン・インパクトォ!!!」

「疾風!!!」

ーーーーー！！！！！ーーーーー

放たれたお互いの最大の攻撃はもはや音を捨てるほどの攻撃であった……

その攻撃がぶつかり、極光を発して、

そして収まったときに周囲はもう一度地図を書き直さなければいけないほど変わっていた。

その跡には地面を背に横たわる男の影が二つ。

「ははははは・・・・・・引き分けだな」

「ああ、そのようだな」

「ところで、二度目なんだがもういちどあんたの名前を聞きたい」

「いいだろう、ハクメンと名乗っているが本名はハザマだ。

ややこしいかもしれないが人が居るときはハクメンで呼んでくれ

居ないときはハザマと呼ぶといい」

「なんかややこしいがまあ、いいぜ、俺の名はラカン。ジャック・ラカンだ。よろしくな！　ハザマ」

「ああ、よろしくたのむジャック。」

「歩けるようになったら街に行って飲まねえか？今ならきっと旨い酒が呑めるぞ」

「それはいいな」

「「あっははははははははは」」

こうして対等に戦える喧嘩友達、ジャック・ラカンができた日であった

本編　第二話　こんなのが最強じゃチートなるのも納得だ（後書き）

とゆうことでジャックさんが友人になりました

次回、赤き翼との邂逅です

それと今回で書き溜めがなくなってしまい

不定期更新になるかもしれません

出来るだけがんばります

本編　第三話　鍋はみんなで楽しく食べるものだよな（前書き）

今回はラカン襲撃です

９／１０　一部の技の表現を変更

本編　第三話　鍋はみんなで楽しく食べるものだよな

ーラカンｓｉｄｅー

「ターゲットはこの三人とこの少年だ」

「なんだガキじゃないか」

「子供だと思って油断すると痛い目を見るぞ。部下を何人か付けるか？」

「いや・・・・一人で充分だ・・・安心し「いや、私が付いていこう」

・・・・・なんでこんなとこにいるんだハクメン」

「なに、ただの偶然だ。」

今、話に割り込んだ白い鎧になにもついてない白い仮面をかぶっているやつの名はハクメン

もう三年も殴り合ってる友人だ。戦績は五十戦五十引、いつか勝ってやる

「つか、なんでてめーがここにいんだよ」

「ここにきたら、貴様がいてな、それと付いていけばおもしろいこ

とになりそうな雰囲気だったのでな」

「そんな理由かよ・・・・・まあ、いいぜ。ただし手出し無用だ。最後の少年はもらうぞ」

「別にかまわん」

「こいつは大丈夫なのか！？」

いちいちうるさい野郎だ。

「かまわん。こいつの実力は俺様と同じだ。わかったか。」

「つっ・・・いいだろう」

「さて、いこうぜ」

「ああ」

―ナギｓｉｄｅ―

「んっふっふ～こいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かぁ

それじゃ早速肉を～♪」

「あっ！　おまっ・・・・・何、肉を先に入れてるだよ！」

詠春、すこしうるさいぞ。

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

「いいじゃねぇか、旨いもんから先でよ。ホラホラ」

どんどんいくぜ～

「バッ、バカ！　まず火の通る時間差とゆうものがあってだな・・・

まず野菜を入れてだな・・・・・あー！ちょっ！おまっ」

「あ～　うっさい！うっせーぞ、えーしゅん！」

そんな様子にアルはすこし苦笑いで

「フフ・・・・・詠春、知っていますよ、日本では貴方のような者を

『鍋将軍』と呼び習わすそうですね。」

「ナベ・ショーグン！？」

なんか強そうな感じだ！

「つ・・・・強そうじゃな。」

「わかったよ・・・・詠春。　これの負けだ。

今日からお前が鍋将軍だ。」

「全て任す、好きにするがよい」

「んー・・・・・・・なんか嬉しくないなー」

そんな風に食事が進んでいく。ショーユとかゆうソースが旨かった

姫子ちゃんに食わせてやりたいな

そんな騒がしくも楽しい食事が過ぎていく

だがそんな食事も以外な結果で閉じる。

いきなり剣が鍋の近くに刺さって中身をぶちまけられたのだ

しかし詠春以外は具材、主に肉などを確保していた

で当の詠春はひっくり返った鍋を頭からかぶってしまった。哀れ詠春・・・・

ナギは心の中で爆笑でした
そんな詠春が怒りで震えているところに
崖の上から大声で
「食事中失礼～～～～ッ！。
俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！いっちょやろうぜ」
なんだあいつバカか？
「えいしゅ・・・むお！？」
「フフフフ・・・」
詠春が鍋かぶって震えながらなんか笑ってる！？これは切れるな。
「食べ物を粗末にする者は・・・・」
「どーしたー来ねーのかぁーー。来ねーならこっちから「油断が過ぎるぞ、ジャック」いっ・・・・」
ーーーーカキンッーーーーー
「「「「なっ！？」」」」
突如として現れたハザマ（ハクメン）に驚いていた。詠春の一撃を止めたことにも

そして一度みたら忘れないほどの特徴ある鎧と仮面を着る剣士であることに

「おい、ハクメン、手出し無用といったはずだ」

「挑む前に決めただろう、侍は私が相手をすると」

「ちっ、わかったよ、俺は赤毛をやる。手出すなよ」

「ふっ、いいだろう」

そういって筋肉ダルマは俺の目の前に下りてきた。

「さ〜ていっちょやりますか。」

「へっ、いいぜ。来な」

そうして戦いは始まった。

―詠春ｓｉｄｅ―

今対峙しているハクメンと名乗っている剣士、おそらく南の噂でき
いた『白い鎧武者』なのだろう

その噂では白い鎧に何も付いてない仮面をしているとのことだから
まちがいない

「私の名は青山　詠春。一剣士としてあなたに戦いを挑みたい」

そう私の一撃を受け止めた際に彼の技量がすごいとわかったのだか
らこそ

そして、同じ野太刀使いとして、挑んでみたくなったのだ

「いいだろう、侍よ。我が名はハクメン推して参る！」

ハクメンの構えは体を横に向け、野太刀を水平に腰だめに持った奇
妙な構えだった

だが隙がない、様子見で斬鉄閃（ざんてつせん）を飛ばしたが最小限の動きで避けられ

「鬼蹴（きしゅう）！」

―――――ダッ――――――

そのまま彼は瞬動術に似た技で目前へ来て、斬撃が来ると思い、防御したが

「閻魔(えんま)！」

ーーーーガッ！ーーーーー

「グハッ」

不意を付いたアッパーをまともに喰らい空中にあがってしまった

彼も一緒に空中に上がり追撃をかける。がそうはさせまいとカウンター気味に剣を振ったが

「蛍火(ほたる)！」

「斬岩(ざんがん)けっ、なっ！？しまった！」

空中で蹴り上げのような後ろ回し蹴りで的確に剣を弾かれた

そのまま彼は回転を生かして、体制が崩れている私に

「椿祈(つばき)！」

「くっ」

ーーーーキンッ・・・・・・ドゴンッ！ーーーーー

そのまま打ち落とすように刀を叩きつける。
かろうじて防ぐことは出来たが勢いを殺しきれず、地面へ叩きつけられた
肺の中の空気が衝撃で外にもれ出る、だがそんなものはかまわず転がる

ーーーーーズバッ！ーーーーー

自分がさっきまで居た位置が真っ二つに切れる
「ゴホッ、ゴホッ、ガハッ、はあ、はあ・・・・・・強い」
さっきまでの攻防でわかった、彼は強い、剣士として
だがそんな彼を倒す。勝ちたいと思った。自分の中にある剣士の血としての宿命なのだろう
「なに、謙遜するな、貴様も剣士として私が戦ったもの中で一番強い（この世界で）」
「フフ、あなたほどの剣士に言われると嬉しくありますね」
自分が強いと認めた人物に強いと言われると少し嬉しいですね、越えたい気持ちが高いですけど

「だからこそ、全力の技をもって、貴様と対峙しよう。」

・・・・そうか、彼は強いと認めたからこそ敬意をもって対峙してくれている

ならば私も全力の奥義をもって答えるのが礼儀だ。

「いいでしょう。これが我が神鳴流(しんめいりゅう)の奥義(おうぎ)をもって相手致す。」

構えを取り。あの技を出すために力を溜める。

「いいだろう・・・・・さあ、来い！！」

「神鳴流決戦奥義(しんめいりゅうけっせんおうぎ)、真(しん)・雷光剣(らいこうけん)！！！」

極光を発す、巨大な雷撃に彼は

「虚空陣奥義(こくうじんおうぎ)！！！」

野太刀を右手だけでもち、左手を太刀の背に添えて、水平にかざす。

すると彼の目の前に彼ほどの魔方陣、いや紋章に近い円が出現し、

それが雷撃に触れたし瞬間、

ーーーーパチンッーーーーー

目の前、いや彼と私の周りの空間が

真っ白になった

いや正確には私と彼は真っ黒になり、空間が白く変るとき、私と彼以外の時間が止まった

そして、彼は野太刀を右手で横に大きく振りかぶり。

「悪滅(あくめつ)！！！！！」

ーーーーーゴッ！ーーーーーー

黒い斬撃が空間の一部を抉りながら黒く染め上げる

ーーーーーゴッ！ーーーーー

また黒い斬撃がここを私や真・雷光剣ごと黒くなっていく

ーーーーーゴゴッ！ーーーーーー

だんだん黒い斬撃が増えていく

ーーーーーゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！ーーーーー

そして黒い斬撃がこの空間を真っ黒に染め上げると

ーーーーーバギャンーーーーー

ここを染め上げていた黒い斬撃が一斉に弾けた

真・雷光剣は消え、私もそれを打ったままの状態から倒れ

意識を失う前に見たのは

刀を収め、兜の後ろから地面に届きそうな白く美しい髪を風に靡(なび)かせながら

威風堂々と立っていた彼の背中だった

ーハザマｓｉｄｅー

ふう・・・・・こいつ、青山詠春とかゆう剣士も最強の一角か

なんせあの雷撃は当身のすぐれたハクメンの奥義「悪滅（あくめつ）」か「蒼（ブ）（碧（レイブルー））の魔道書」、

又は三輝神（さんきしん）「ツクヨミユニット」クラスのものしか防げるものがなかった、

ああ、そして剣士同士で斬り合うのもとても楽しかった。依頼では勝つの当たり前になっているからな

だからこそ、対等の戦いがとても心躍るものだ。やはりここでは適度な強さにして正解だった

「次はわしが相手じゃ」

そう言って古めかしい言葉を使う少年がおりてきた。

「いや、ジャックとの約束で私は剣士しか相手しないから安心しろ」

そう、彼らに挑む前にジャックと決めたことだ、剣士はやるからあとは俺がやると

「それは信用してよいのか？」

「敵対するなら剣を仕舞いはしない」

「敵対しないなら、まあよい。」

ーーーーードッ！ドドッ！！ドウッ！ドギャ！！！ーーーーー

向こうを見れば周りを焦土にしながら戦っている二人の姿が見えた。

二人ともとてもいい笑顔で周囲を壊しながらたたかっている。

邪魔をするの無粋とゆうものだろう

「あの馬鹿どもは放っておいて、それよりも詠春を倒したあの魔法がしりたいのう

あれほどの魔法はわしでも知らんからのう」

「ん？ああ、それのことなら私は「術式（じゅつしき）」と呼んでいるのだが、少

し見るか？」
そうして私は少年に氷、ジンが使う術式を見せた
「こ、これはすごいぞ！構成が今までとは違う！」
「ゼクトがそれなら私も興味がわいてきました」
「それはいいんだが名を言ってからにしないか？」
「ああ、そうじゃのう。わしの名はゼクト、それについて少々聞きたい。」
「私はアルビレオ・イマ。長いのでアルと呼んでください。」
「私は偽名でハクメンと名乗っているが、本名はハザマだ。人が居ないときはそう呼んでくれ」
「そうか、よろしくたのむ」
「ええ、よろしくお願いします。ハザマ」
それから、破壊音をＢＧＭに
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー三時間後ーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー
「ほうほう、これはなかなか便利じゃな、ある程度資質に左右され

るが偏りなく使えるのは」

「たしかに」

「あとでそちらの魔法も教えてくれないか？」

「かまわん、それになかなかいいもの見せてくれた礼じゃ。」

――――――――――――――――九時間後――――――――――――――――

「これはユキアネサだ」

「おお、これほど密度の高い魔装具は初めてじゃ」

「これほどの冷気を持ってなおかつこのサイズの魔装具はすごい」

「う、う～ん」

「おや？詠春が起きたみたいですね」

それから、即席魔法（術式）研究会は

――――――――――――――――――――十一時間後――――――――――

「やはり鍋は具材をいれる順番がありますよね」

「それについては同意見だが鍋は楽しくやるものだ、あまり言い過ぎるのもよくない」

「う・・・・た、確かにそうかもしれないですね。それと私は醤油に大根おろしです」

「ほう、私は大根おろしにポン酢、そしてもみじおろしをいれる」

「もみじおろしとは少々マニアックですね」

「それは好みだ」

いつの間にか詠春との鍋談義に変っていた。

そして十三時間後

「む、どうやら終わったようじゃな」

「そうですね、彼らはまだやる気らしいですが限界のようです。さて回収にいきますか」

「そうか、では私も肩を貸しにいくか」

「ええ、また今度ってことで」

「そうだな、では」

そうして私たちは分かれたが、なんかいろいろな起こったりしてい
つの間にか

「「ガッハハハハハハハハハハ」」

ナギとジャックが一緒に酒を飲んでいて、仲間になっていた

「なんでこうなったのだろうか」

「それは見なかった方向で」

まあ私も詠春と飲んでいるのだが。

そんなこんなで紅き翼（アラルブラ）に入ったのでした

本編　第三話　鍋はみんなで楽しく食べるものだよな（後書き）

このＳＳ初ＡＨはかっこいいと評判の悪滅になりました

詠春さんとは侍同士で何か通じるものがあったのしょう

ちなみに詠春さんと仲良くなったのはのちのちわかります

次回からまた依頼編になります。どんな世界でどんな風に介入するかはお楽しみに

依頼編　第四話　真・恋姫無双　ここでは貴重なお仕事です

－ハザマｓｉｄｅ－

どうも、ハザマです。帰ってきたばっかなのにまた依頼で他の世界に行っています

時間とかどうするんだよって、思ったのだが

あの世界以外ではどうやら不老不死になっているらしく問題なかった

寿命についてもあの世界の時間だけカウントしているみたいだし

それにあの門についてもものすごく特殊な造りをしているらしく

あの門に入ったらどんなに長い時間を過ごしてもあの世界では１分程度しか経ってないらしい

依頼の世界に行って門を出した世界でも同じようだった。長期依頼に対応しているも気が回る人だ

さて、今回は真・恋姫無双の世界に来ています。とゆうかもう三年は居ます。

まあ半年に一回戻っていますけど。

なぜ三年も前にいるかとゆうと、私が持っている力と世界の法則がかみ合わないみたいで

ウィンドウズではマックのソフトを使えないようにこの世界の法則に私の力が適していないらしく

此処に滞在しているのはこの世界の法則を私が力を使っても問題ないように世界さんが調整するためだ

世界さんいつもいつもありがとうございます

これは世界によってまちまちで最初に行ったなのはの世界はちょうどよくかみ合っていたから

ひどけれは五年以上もかかることもあるし、最適化をしていない状態の世界で無理やり

力を行使すると世界が壊れてしまうと世界さんに釘を刺されいますしね

あの時聞き忘れていた「神」のことを聞くと世界さんが処理をやっているらしい。

「神」については上位の世界さんに任せたほうがいいだろう。餅は餅屋ともゆうし

それは置いといて。依頼の内容はなんでも外史の管理者に転生した奴の始末＋

天の御使いとしてここら付近に現れる北郷一刀ではない天の御使いを助けろとゆう依頼

え？前回とほぼ同じじゃないか？そんなもんです。似たり寄ったり

です

それに世界さんは他にも転生者がいたらがそのときは知らせるそうですし

原作介入もよい方向に導くようにするなら許可されています。

かえって悪くなるかもしれないって？そこらへんはあんまりやりたくないようだが

世界さんが都合よく流れを操作してくれるようだから安心できます。

さて、三年もいればどこかで馴染んでいるはずですよね。

はい、ある村に私はあることをして住んでいます。そのあることとは勢いよく扉が開かれる音と共に桃色の髪を持つ、のほほんとした雰囲気の女の子が入ってきた

「狭間（ハザマ）せんせ～。」

「おや？桃香（とうか）ちゃんじゃないか。今度はどうしたのかな？」

「鈴々（りんりん）ちゃんが食べすぎちゃって。」

「・・・・・はあ、またですか。」

「うう、なにも言い返せない・・・・先生案内しますので来てください」

「わかったよ」

さっきの会話からお分かりの通りここで医者をやっています。ライチさんからの引用です。

ついでにライチさんの服で医者用の服である、それを男性用に改造してあるもの。眼鏡付き

医者としての能力も使えるようになっているのは僥倖でした。

そのおかげで村の人から人気ものですよ。引っ張りだこです。

それと偽名として王雲形（わん・うんけい）と名乗っています。

中華風にいえば姓は王（わん）、　名は流（りゅう）、　字は雲形（うんけい）

さらに恋姫では真名があるので本名のハザマ（狭間）を名乗っています

そんなこんなで村のみなさんから慕われています。

そんなことを思っているうちに目的のところについたようだ

そこに赤い髪の元気そうな女の子が

「うう～、せんせ～・・・おなかいたいのだ～」

そう言って、うずくまっている

「はいはい、まずはこれをお飲みなさい。」

そうして飲ましたのは漢方薬を渡す。

「ゴクッゴクッ・・・・・うう～、せんせー直んないよ～」

「それはそうです。どんな良薬もすぐには効きません。だから効くまでの間反省しなさい」

「ひどいのだ～」

その言葉に今度は黒髪の凛々しい女の子が

「鈴々（りんりん）、先生のことばと聞かずに食べた結果がこれだ。反省しろ」

「愛紗～、ひどいのだ～」

そんな様子を桃色の髪の子、桃香（とうか）ちゃんは

「クスッ」

幸せそうに笑っていた。この世界の今の時勢にこんなことが出来ることがうれしいのだろう

「ああ、桃香（とうか）ちゃん」

「なんですか、狭間（ハザマ）先生？」

「私はこれから二、三日出かけなくてはならない、だから私が留守の間、よろしくたのむ。」

「わかりました。」

彼女には医学を教えている。誰かを助けたいと願ったからこそ教えた。

それに命とゆうもの教えた。そのかいがあって彼女は出来る限りの命を助けようと思い至ったようだ

「ではいってくる」

これから行くのは水鏡私塾とゆうところだ、いろいろなことでそこの水鏡先生と懇意になり

ときどきそっちに赴いて、医学を教えている。水鏡先生でもそれは専門外だったらしい

そんなこんなで到着。するとベレー帽と創作の魔女がかぶっている三角の帽子をかぶった

女の子がこっちに気づいて、こちらに向かってきた

「あ、狭間(ハザマ)先生。お久しぶりです」

「先生、お久しぶりです。」

「ああ、久しぶりだね、朱里(しゅり)ちゃんに雛里(ひなり)ちゃん。」

この二人はこの塾に住んでいて二人ともとても優秀だ。
戦う力がないから他の手段として知識を使って人助けをしよう勉強しているところに
医学とゆう、直接人を助けることができるものを知り、習得しよう必死になっている
「では水鏡先生の所に案内します。」
「うん、助かるよ。」
「先生、また後で聞きたいことがあるのでいいですか？」
ふふ、この子は勉強熱心だ。教え甲斐がある
「ああ、水鏡先生と会ってからでいいか？」
「はい！いいです。」
「さて、いこうか」
それからある一室に案内された。そこには長い茶髪を後ろで蝶々結びをする落ち着いた人が居た
「お久しぶりです、水鏡さん」
水鏡さんはここで私塾を開いている人だ。それに孤児を引き取ったりする人でもある

「ええ、久しぶりです。狭間さん。いつも来てくださいまして、感謝します」

「いや、これは私が勝手にやっていることだから気にしなくてもいいですよ。」

「それでもですよ、少々お疲れでしょう。これから食事はいかかですか？」

「ありがたくいただきましょう。朱里(しゅり)ちゃんや雛里(ひなり)ちゃんも一緒がいいでしょう。

いろいろと聞きたいこともあるでしょうし。」

「判りました。秀斗(しゅうと)、案内してあげなさい。」

そういってでてきたさきほどの朱里(しゅり)や雛里(ひなり)より少し年上の少年が出てきた

彼の名は月英、ぶっちゃけると転生者です。まあ彼はこちらが介入者だと気づいていない

まあ、この世界に馴染める格好をしてるし、気取られるようなへまはしていない

彼は依頼外なので手助けしなくてもいいのだが、私はそれぞれの覚悟や意志の強さを

見て、するかどうか決める。依頼の人物は全員合格でした。世界さん人選パネェ。

全員、素で主人公補正かかっているとかいますから、どこかの世界だったら

全員主人公やら勇者になれます。ほとんどオリ主として活躍しています。

彼については現在保留です。確かめるのはもう少し後になります

「先生、わかりました。・・・・それでは狭間先生、こちらへどうぞ」

「ああ、わかった」

そして

「これはおいしい」

「「ほんとですか！！」」

どうやら二人が手伝って作った料理らしくとても喜ばれた

「ああ、おいしいよ。」

そういいながら、笑顔で答えると

「やったね、朱里(しゅり)ちゃん！」

「うん！私たちがんばったんだから！」

笑顔でそう言っていた（注、普通の満面の笑みです。赤くはなっていません）

そんな一朱里たちの様子を見て、水鏡先生が微笑んでいる。

そんな風に食事が進んでいく中、あることが耳に入った

「最近、賊が多くなってきたね。」

「うん、最近多くなってきたから気をつけないと」

そんな言葉を聞き、もうすぐか、と心の中でつぶやいた

それから少し後黄色い布を巻いた暴徒が現れ始めた。

依頼編　第四話　真・恋姫無双　ここでは貴重なお仕事です（後書き）

恋姫編は二三話続きます。いつの間にか先生ポジにいったハザマｗ

まあ手助けやらをしてるんで自然にそうなったのでしょう

原作キャラに接触することによってその人物の思考やらが少々変っています

劉備こと桃香ちゃんですがハザマから医学を少々学んでいるため

後衛でかんばって治療に励んでいます。考えも少々上方修正かかっていますし

ハザマについての追記

作者にとって最強とは個人で出来る限界の全てを出来ることだと思っていますので

ハザマさんは万能キャラになっています

特技、ほとんどと書けるくらいです

搦め手や政治圧力が利かない上に力押しも通じないとなったら

どうしようもないでしょう？なのでこうしています

この作品を読んでくれてありがとうございます

依頼編　第五話　いろいろ知っていると便利です

ーハザマｓｉｄｅー

おーよしよし、

「これで大丈夫だ」

「・・・・・・ありがと」

「感謝してやらないこもないです」

「ははは、どうも呂布(りょふ)さんに陳宮(ちんきゅう)さん」

あれから時間が経って、黄布党が倒されつかの間の安息に時期になっていた

いろいろと調べたところ、この世界は漫画版を元にゲーム版のを少し加えた構成になっているみたいだ。なぜなら北郷一刀が記憶喪失になっているからだ

それにオリ主と一緒に落ちてくるとは予想外でした。まあ桃香(とうか)ちゃんは

強化してあるから任せても安心できます

それでさっきの会話から呂布さんたちは逃走していないことから真版も加わっているのがわかる

で現在洛陽にて放浪の医者兼獣医師をやっていたところに呂布さんの愛犬が怪我をして

今に至るのです。

それで呂布さんたちに感謝されているところです

そっからお礼に屋敷で食事をしていて、医者であることが判ると仕官させるためお城へ招待されています。

「それで医学の心得があると聞いているのだけど」

そういったのは緑の髪で眼鏡をかけたとがった雰囲気を女の子、名前は賈駆(かく)である

「ええ、そうです」

「ならその知識を我が董卓(とうたく)軍で生かしてみてはどう？」

これは渡りに船だ、し水関(すいかん)か虎牢関(ころうかん)でどさくさに紛れていこうかときめたのだから

「ええ、いいでしょう、」

「え！？そんな簡単に決めていいの！？」

自分があっさりと決めたことに驚いているようだ。確かに医学は貴重であるからいいように
使おうとする者が多いからか断るだろうと予測していたのだろう
「ええ、ただし客将とゆう扱いで」
「まあ、いいわよ。僕の名は賈駆(かく)よ、宜しく」
「では私の名は王流(わんりゅう)です、よろしく」
「さっそくなんだけど、あなた医学以外に何が出来るか教えてくれない？」
将になるものの戦力分析か
「武芸も少々ですが出来ます。この時勢、武が無ければ旅すらでしませんし」
その言葉に賈駆(かく)は意地悪そうにニヤリとして
「なら、実力を測るために手合わせをしてもらっていいかな？」
「ああ、かまわないが先に部屋を用意してくれないか？いろいろと荷物があるからね」
「いいわ。一刻後、錬兵所にきてちょうだい。部屋に案内しなさい」
「はっ、こちらへどうぞ」

そうして案内された部屋でいろいろとやるのであった。主に世界さんに途中報告とか

そして一刻後、錬兵所で

「紹介するわ、今からここで客将をすることになった王流(わんりゅう)よ」

「王雲形(わんうんけい)だ。医学師をやっている、よろしくたのむ」

その言葉にさらしを巻いていた女性が

「うちの名は張遼(ちょうりょう)やよろしくな。それでなんで医学師なのにここにおるんや？」

張遼(ちょうりょう)の疑問に賈駆(かく)は

「こいつもある程度武芸ができるらしいからそれがどれ位か確かめるためよ」

その言葉に銀髪の女性が

「なら私が相手をしよう」

「分かったわ。あんたの相手は華雄(かゆう)でいいわね。」

「ああ、それで構わない、では」

そうして、白い布で少しだけ全体を隠し、一瞬で戦闘用の服に変える（露出はほとんどありません）

周りが早着替えに驚いているのを構わず、萬天棒(まんてんぼう)を構える

萬天棒(まんてんぼう)は原作通りに動く仕様で、怪しまれないように鎖で繋いであるように偽装しています

武器の分類では多節こんに分類されます

「貴様もやる気だな」

それに応じて華雄(かゆう)も金剛瀑布(こんごうばくふ)を構える

それから少しの静寂の後、闘いが始まった

―詠(えい)side―

今僕は目の前で対峙している二人をみている

一人は前からいる、猪といわれているがれっきとした武将の華雄(かゆう)

金剛瀑布(こんごうばくふ)を腰だめに構えている

もう一人はさきほどより客将となった王流(わんりゅう)、

さっきの早着替えには驚いたけど、今は棒を少し珍しい構えで構えている

華雄(かゆう)が動かないところをみるとそれなりに実力はあるのだろう

そう思った瞬間、華雄(かゆう)が一気に距離を詰め、横薙ぎを放つ

「はぁ！」

ーーーーーゴオ！ーーーーーー

「甘いぞ！」

だが王流(わんりゅう)は姿勢を低くしてかわし、そのまま棒で足払いを仕掛ける

だが華雄(かゆう)は軽く飛んでかわすが、足払いから連続で回し蹴りが来る

「おぉ！」

「くっ！」

ーーーーーガッ！・・・・・ズザザザザ！ーーーーーー

蹴りを防ぐことはできたが空中であったために飛ばされ距離を離された。

そして華雄(かゆう)は笑っていた。おそらく予想以上に相手が強いからなのだろう

そこからまた華雄(かゆう)が近づいてきて、それを王流(わんりゅう)が阻止しようとして突きを出すが華雄(かゆう)は体をひねって避けその力で攻撃を出すが避けられる。がそのまま連撃をだして相手に反撃をさせない

ーーーーービュオ！ヒュオ！ガッ！ゴッ！ーーーーー

それを王流(わんりゅう)は捌く

それにしてもいい意味で予想外だった。武力も華雄(かゆう)と互角に闘える

それに医学者といっていたことから知識も教養もある

武官にしてもよし、文官にしてもよし、そんな万能な者が客将とは

いえ

味方になるのだからうれしい事である。賈駆(かく)はそう考えていると勝負が付いたようだ

勝負の内容はさっきの華雄(かゆう)の攻勢の際、王流(わんりゅう)が反撃をしたところ

お互いの武器が弾かれ、お互いに無手になり、華雄(かゆう)は武器を拾おうとしたが

王流(おうりゅう)がさせまいと素手での戦いになり

素手での闘いかたを知らない華雄(かゆう)に対し、ハザマは拳法をもっていた。

そのため。素手での戦いで圧倒して勝利したのである

それで華雄(かゆう)が武器がないから認めんとか言っているけど、彼に組み伏せている。

ーーーーギリギリギリギリギリーーーーー

「あんた、華雄(かゆう)を完全に組み伏せるとか。すごいな、もしかして力ある？」

「いや、これでも医学者だから人体については詳しい、少ない力でも完全に抑える術も

知っている。薬も元は毒、だから治しかたを知っているのだから、効率よく相手を抑えたり

殺す術も然りって訳だ」

・・・・・・・それって、一番恐ろしいことなんだけど。

・・・・・・・・・・・・でも、闘いの中でそれを実行できるってことは指揮も期待できる

うん、それといろいろ言ってうるさい華雄(かゆう)を笑顔で更に絞めるのはやめてくれない？

めちゃくちゃ怖い、華雄(かゆう)もそろそろ危険じゃないのかな？

顔青いし、変な声でてるし

その上で和やかに霞(しあ)（張遼の真名）と真名(まな)を交換して談笑してるし

彼、博識らしく霞(しあ)が異国の酒の鋳造法を熱心に聞いている

ーーーーガクッーーーーー

・・・・・・・あ、落ちた

彼も気づいたらしく、処置をして近くに寝かせたみたいだ

手際もよかった。万能すぎない？いくらなんでも。まあ、いいわ

その後みんなで真名(まな)を交換し合ったり。恋(れん)（呂布の真名）が狭間(ハザマ)が作った料理

に舌鼓を打ったりと、ここに馴染んでいった。話せば為になる話が多いし。

恋(れん)もご飯をねだりにいったりとか霧(しあ)が酒について聞きにいったり

そして一ヵ月後

―ハザマｓｉｄｅ―

さて、来ました反董卓連合。ここだけ無印のように詠(えい)ちゃんや月(ゆえ)ちゃん

捕らえられしまった。幸い、こちらが介入者であることには気づいていないようですし

さて外史の管理者として転生した奴は原作のようにこの外史の人物を好きな様に壊したい

とかなんやら。実際に見たよ、あれ。あれは心を粉レベルまで砕かんと気がすまない位

ひどかった、北郷君が洛陽についてから一番調子に乗ったところで砕くとして

それに秀斗君たちと会って確かめないと。

「失礼します」

「なんだい？」

「主君の命にてシ水関にて敵を防げと来ています」

ちなみに自分はまだ部隊をもってはいない、文官の仕事や医療の講師をやっていたためだ

「了解した、そこには他に誰が行く？」

「華雄(かゆう)殿に張遼(ちょうりょう)殿です」

・・・・・なるほど、華雄(かゆう)の押さえ役か、最近は貧乏くじ引くようになったな

「解った、すぐに向かう。下がってよい」

「では失礼しました」

さてあの子達はどれだけ成長したか、見せてもらおうか。

だんだん父親っぽくなってきたかな。

そして舞台はシ水関へ移る。

依頼編　第五話　いろいろ知っていると便利です（後書き）

とゆうことで次回はシ水関の戦いです

依頼編　第六話　なんだか人生の先輩キャラ化している（前書き）

作者のＳＵＭＩです

今回の投稿遅くなってしまって申し訳ない

９／２７改正

依頼編　第六話　なんだか人生の先輩キャラ化している

ーハザマｓｉｄｅー

どうも、毎度毎度同じようですけどハザマです。

今は三国志で有名なシ水関の戦いです。

それにしても関羽（かんう）・・・・・愛紗（あいしゃ）ちゃんがあそこで

堂々とあんな名乗りをするとは・・・教え子の成長に少々感動してしまって

華雄を抑えるのを忘れてしまったよ。先生ポジション定着しつつあるようだ。

「総員。出撃準備だ。我が武を侮辱した関羽（かんう）を討つぞ！」

その結果、華雄が挑発されて出撃してしまった。

華雄が出て行った後、霞（しあ）が話しかけてきた

「なあ狭間（ハザマ）、あんたはどうする？うちは虎牢関まで撤退する。

華雄が勝手に出撃したおかげで守りきれんからな。一緒に行くか？」

さてどうしようか。彼女たちを先生として見ておきたい気持ちがありますし。

ＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉ・・そんな音が頭の中で鳴り響く。それに応じると、時が止まる

急いでいるときもあったので、しっかり聞けるように仕様変更しました

『こちらハザマ。連絡ってどうゆう用件ですか？世界さん』

『突然だが、そっちの近く、袁紹（えんしょう）のところに転生者がいて、そいつを始末してほしい。』

『突然ですね。ちょうど華雄が出撃したのでそれに乗じてやります。それと対象・・・転生者Ａでいいや。その情報を送ってくれないか？』

『了解した、送る。』

頭の中に情報が流れる。出生から考えまで。ん？プライバシー侵害？そんなのどうでもいいです

どうせ消える人だしそれに依頼限定ですが、心の傷抉るのにも使います

調子にのった対象の心を折るのも依頼の際の楽しみの一つです

趣味が悪いって？　そうですドがつく隠れＳです。始末する対象限定ですが、おっと話が逸れました。

『確認した、では。』

Pi・・・・・・・・・・・・　　すると時が動き出した

「いや、敵方にやるべきことができた。だから華雄と一緒に出る。生き残る事と虎牢関に戻る

ことを優先させるから安心してくれ。」

「・・・・・・・わかったわ、なら華雄のことも頼むわ」

「善処しよう。」

「任せたわ。・・・・・皆、虎牢関に撤退するで！」

そうして去っていく霞(しあ)を見ながら、依頼について検証する

今回はさくっと行きます。折るまでもないやつですから。

所詮小悪党、やられキャラ又はモブキャラってやつですよ

さてと、華雄隊の最後尾にまぎれますかな。

そして

「そのままあやつらの頸(くび)を食いちぎれ！」

「おおー！！！」

「はあ・・・・・・突撃ばっかりじゃなくてもう少し周りをみないと。」

そう言いつつ華雄隊に紛れて一緒に突撃しているが、華雄はすっかり逆上して周りが見えていない

愛紗(あいしゃ)ちゃんの隊がわざと引いているのを、華雄は怖気づいていると勘違いしている

このままだと袁紹(えんしょう)軍と当たって、そのまま包囲されるだろう。

まあ、こちらとしては都合がいいけど。おや？少し先に別の隊がいる？

「皆の者、放てぇーーーーー！」

ーーーーーシュパパパパパパパパーーーーー

おお、いいタイミングで矢を放ってきましたね。鈴々(りんりん)ちゃんも将として優秀になって

いますね。先生またちょっと感動してしまいしたよ。ですがその程

度は通じない。

手に持っている萬天棒(まんてんぼう)を高速で回して即席の盾にして

それを使って飛んできた矢から防御する

ーーーーカッカカッカンッーーーーー

漫画とかでも良く出てくる防御法だけど、実際に実行できると本気で便利です。

「くぅ、小癪な真似を！」

ああ、さっきの攻撃で華雄がさらに怒ってしまった。もう袁紹(えんしょう)軍とは目と鼻の先ですね。

お、都合よく転生者Ａがいますね。めんどくさいのでさくっと終わらせましょう。

走りながら萬天棒(まんてんぼう)の先端を地面へ付け、そのまま棒のしなりを使って棒高跳びのような大ジャンプをした。そこからどんどん上がってき、人が一センチくらい

の大きさに見えるほど高く飛んだ後、人ごみに混じった転生者Ａを見つけ。

後ろ向きに一回転しながらある物を取り出した。

ー転生者Ａｓｉｄｅー

はぁ、なんか貧乏くじしか引いていない気がする。まあいい、もうすこししたら反乱してやる

ダ名族と呼ばれているから、うまくいくだろう

そのあと劉備ちゃんたちのところを逃がさず、攻めて滅ぼす。彼女たちを自分の奴隷にしてやる

そんな野望を胸に陣の最前線で待機していたら、華雄の軍が来て、臨戦態勢に入ったとき

一人が飛んだ、大ジャンプってやつだ。馬鹿なのかと思ったが、

その後あいつはＲＰＧ－７に似た物を出した。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・は？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・いや、待て、おかしいだろ。いくらなんでも

ここ、三国志ですよね！？そんな時代に何故に現代の武器が！？

しかも弾頭にキラーの絵が入ってるし！

・・・・あれ？なんか俺、ロックオンされていない？うん、してるな

こんなときは・・・・・・逃げる！三十六計逃げるが勝ちだ！

相手を見ながら逃げる。それで少しは弾道を予測できるはずだ。

そうして発射されるのを見たんだがもう一度、は？って言ってしまった。

いや、だっていくらなんでも一回で五発分とか物理法則無視してるし！

しかも誘導弾ですか！全部こっち来てるし！

・・・・・・ああ・・・・・・・俺終わったな・・・・・・

そんなあきらめとともに俺の意識はそこで途切れた。

―ハザマｓｉｄｅ―

―ドゴォォォン！―

そんな爆発音と共にターゲットとその少し周りを吹き飛ばす。

『零銃（れいじゅう）・トール』　まあぶっちゃけるとＲＰＧ－７なんですけどね。
それに今回はＣＳ（コンティニアム・シフト）のアンミリ版です。一回で五発同時発射の攻撃が可能なチート仕様です。
これで緊急のはよし。さてと北郷君たちに会っておきますかな。

「はあぁぁ！」

－－－－－カキンッ－－－－－

むっ、どうやら華雄と愛紗（あいしゃ）ちゃんの一騎打ちが始まったようだ
華雄がやられる前に行かなくては。約束しましたからね、出来限り任されましたかね

一騎打ちのところまで急ごうとするが途中で水色の髪の飄々とした女性が立ち阻む。

「ここからさきは行かせぬよ。仲間の見せ場なのでな。」

「そうか・・・・では押し通るのみだ」

萬天棒（まんてんぼう）取り、構えをとる

「やはりか・・・・趙子竜（ちょうしりゅう）参る」

あちらも同じように槍を取り、構えをとる

「王雲形(わんうんけい)だ、推して参る」

―星(せい)side―

・・・・・・・・・隙がない。

この男。王雲形(わんうんけい)と対峙したとき感じたことだ。

変った構えをしているが隙が無い。そして見ているところが違う

普通の相手は武器を見るのだが、こやつは違う、腕や足を観察している

戦いなれている、ちょっとでも手を動かせば、動きを先読みされるだろう

だからこそ、下手に動けばやられるだろう。まさか華雄のほかにこのような者がいるとは

それは置き、様子見の突きを放つが、避けられ、そのまま突きを返された。

それを避け、同じように突きで返す。

それから避けては突き。避けては返すといった応酬が徐々に速さを増して繰り返す。

そしていつの間にか

ーーーーーカキンッ！ーーーーー

互いの武器で突き合うようになってなってきた

ーーーーーカッカカキンッ！ーーーーー

私の槍と彼のこんが打つ合い、そこから出る音が一種の音楽となり、私たちが奏でる

そしてだんだんと打ち合う速度が速くなっていく

「はいはいはいはいはいぃ！」

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ーーーーカカッカカカキンッ！ーーーーー

打ち合いが早くなるに音の継ぎ目が少なくなっていく

そして極限と言ってもいいほどの速さまでいくともはや腕の動きすら見えないほど速くなっていた

もはや私の思考もだた『相手よりも速く突く』しかなくなっていた

打ち合いの速さは瞬きの間に二、三合は打ち合えるほど速い

打ち合った数は百合はいっている、数が多すぎて数え切れないくらいだ

「・・・！・・・・！・・・・！」

「・・・・・・・・・・・・・！」

ーーーーガガガガガガガガガガガ！ーーーーー

そして音はマシンガンの発射音のように繋がっていた

掛け声ももはや息だけになっている

いったい後どれ程打ち合えばこの打ち合いは終わるのだろうか？というくらい壮絶であった

だが予想に反して、その音は不意に終わりを迎える。ハザマが離れたのだ

それでもあの極限ともいっていいほどの神速の突きあいを見切って、後退したのだ

たとえ趙雲（ちょううん）であっても、引けばやられていたであろう

それが彼、王雲形（わんうんけい）の凄まじいほどの技量を物語っていた

「はあ・・・・はあ・・・・・どうした？何故にやめた？このまま行けばおぬしの勝ちだったのに」

そう疑問に思ったのは当然だ。こちらは息切れをしているがハザマは少ししか切れていない

それにあそこまでの速さをもう一度やれといわれてもできないだろう

もしかしたら一歩手前はできるかもしれないがそれでもすごいことなのだろう

このまま行けば彼女の敗北は必至だった

「いや、こちらの負けだ。やるべきことを達せなったのだから」

その言葉の後、遠くで

「敵将華雄！劉備(りゅうび)が一の家臣、関雲長(かんうんちょう)が討ち取ったりーーーーーっ！！」

その言葉に敵軍に同様がはしり、味方は高揚した

「そうか、一騎打ちに勝ったが、戦には負けたとゆうことだな？」

「ああ、だからここで撤退・・・・・は簡単にさせてくれないようだ」

周りを見渡すと自軍の兵が完全に包囲していて

「降伏してくれないか？」

「鈴々からもおねがいなのだ先生・・・」

そこから御使い殿（北郷一刀は主殿と呼んでいる）と鈴々が出てきて、降伏を勧めた

―御使いｓｉｄｅ―

自分たちはいま包囲して降伏を呼びかけている、何故こんなことになったかとゆうと

さきほどまで星(せい)がある人と打ち合っていて応援に来たのだが

その打ち合っている人を鈴々(りんりん)が見た途端、驚いて

「先生!?なんで先生が星(せい)と闘っているのだ!?」

「鈴々(りんりん)、あの人を知っているのかい?」

「うん、村にいるときいろいろと教えてくれたのだ。」

「じゃあ、なんで星(せい)と闘っているかわかるかい?」

「わかんないのだ。でも先生はむやみにそんなことしないから、きっと何か理由があるのだ!」

鈴々(りんりん)がそこまでゆうことならいい人なのだろう、話を聞きに行こう

「わかった、なら包囲して降伏を呼びかけよう。お願いできる?」

「はっ！」

そうして今に至るのだが。

「すると思うかい？」

「するしか選択肢がないとおもうけど」

彼からすれば周りに敵しかなく、味方はいない。もう詰みの状態だ

「いやもう一つ選択肢がある・・・・・さて、御使い殿、取引をしないか？」

「すると思うのか？・・・こっちが圧倒的有利だが」

「ああ、君にとっては最高の交渉材料があるからね。」

「・・・・・それはどうゆうものかな？」

「現代、日本、君たちがいた時へ返す道を用意できる。代わりにここから撤退させてくれ」

「・・・・・・・ッ！！？？」

「「？」」

帰れるのか？本当に、あそこへ・・・・

「それは・・・・・本当なのか？・・・・本当に返してくれるのか？・・・」

声が震える。もう帰れないと思っていたところに突然帰り道が出てきたのだから

嘘かもしれないのにどうしても声が震えてしまう

「ああ、本当だ」

「鈴々（りんりん）、それは本当なのか？」

俺は思わず、あの人を知っている鈴々（りんりん）に聞いてしまう。初めて会う人の言葉より

知り合いの言葉の方が遥かに信用できるのだから。

「うん、先生は一度も嘘ついたことないのだ。」

「信用も取れたところで、さて、どうする？御使い殿」

・・・・そうか、だとするとあの人は本当にやれるのだろう

ここに来てから心の片隅にあった、平和な日本に帰りたいとゆう願い

そしてその願いを叶える方法が今ここにある。だがそれは・・・・・・

悪魔の取引だ。それに乗ってしまうのは

彼女たちを裏切るのと同義だ。俺を信じてくれた人たちを見捨てることだ

帰りたいと思うのはあるが此処に来てから俺を信じてくれた人たちを裏切ってまで

帰る気はない。だから・・・・だからこそ、答えは決まっている、それをそのまま出した。

「それは受け取れない。俺は彼女たち・・・桃香(とうか)たちや一刀を置いて帰ることなんて

死んでも出来はしない！俺は決めたんだ！桃香(とうか)の願いを叶えようと！」

そう・・・・これが俺の本心。偽り無い本当の気持ちだ！

ここで桃香(とうか)たちを見捨てるような下衆でない！

「フッ、フフ、あっはははははは」

「なにがおかしい！」

「フッ、いや君の覚悟を見せてもらった。もし君がを受け取ろうしたら即座に君を切り捨る所だよ」

「そうなのか」

そうゆうことですか。わざと本当に甘く、甘く聞こえるようなものを出したのか。あんた、鬼だろ

「だからこれを受け取れ。」

すると彼は槍をくれた。星(せい)たちが使っているのと少し違う。

形状的に言えば、先端に矢の鏃を大きくしたような巨大な鏃が着いていて。

石突には鋸(のこぎり)のように三角状の刃が持ち手の前まで並んでいた。なぜか妙にしっくり

と手に馴染む。鋸(のこぎり)の刃も手を傷つけないような絶妙な位置にあった

「これは？」

「空突槍(くうはそう)だ（ツバキの「神槍(しんそう)・空ヲ突ク槍(そらをつくやり)」に出てくるものを槍にした物）」

「なぜ、こんなものを俺に？」

「あの子たちが君たちを主と決めたなら、それを師として微力ながらも応援しようとな。

だからこそ、私の真名、狭間(ハザマ)、を受け取ってくれ。」

「先生・・・・・・」

・・・・そうか、いい先生だな。彼女たちが心配だからこそ俺を試したのか。

彼女たちを裏切るような奴ならばあの人は即座に俺を切るつもりだったのだろう

「解った。では狭間(ハザマ)さん。降伏してください」

「だが断る」

「ちょっ！？もう降伏するしかありませんよね！？」

まさかの某冒険の漫画家の名ゼリフを聞くとは思わなかった

「ここから抜け出す方法はありますよ・・・・・・伸びろ！」

ーーーーージャララララーーーーー

！？袖にしかけ鎖をいれていたのか！・・・・・？、何故岩壁の方へ？

ーーーーーガブッ！ーーーーー

鎖が壁に到達して止まった・・・・・・ハッ！まさか！

「皆、彼を抑えろ！」

僕の言葉に周りが動きだすが遅かった。

「蓬閃・参（ほうせん・さん）」

ーーーーバッ！ーーーーー

しまった！狭間（ハザマ）さん一瞬浮き上がったと思った瞬間、すでに崖に移動してしまった

失敗した。せっかくのチャンスを無駄にしてしまった。

「ここは撤退させてもらいます。私にはまだあちらでやるべきことがあるので。

残念ですがここで撤退させてもらいます。鈴々（りんりん）ちゃん、元気でいるように。」

そういって虎牢関（ころうかん）の方へ去っていった

「先生・・・・もう少しお話したかったのだ」

「とりあえず陣に帰ろう。皆に話さないと」

「うん」

「了解した。御使い殿」

そうして俺たちは勝利を収めた。陣に帰ったとき鈴々（りんりん）が暗いことと槍のことを聞かれて、

正直に狭間(ハザマ)という人がくれたと答えたら、桃香(とうか)、愛紗(あいしゃ)、朱里(しゅり)、
雛里(ひなり)が見事に「「「「なんで（狭間(ハザマ)）先生が此処に！！？？」」」」
声を揃えて驚いていた。桃香(とうか)がこれ以上ないくらいテンパったり。
朱里(しゅり)たちが

「あわわ」「はわわ」の最高記録が出るほど言っていた。あと一刀
が置いてきぼりだった

落ち着いて話をしたところ、きっと虎牢関か洛陽にいるはずだ。と
結論になり

彼に董卓たちを助ける為に来ていることを話し、協力してもらおう
ってことになった

そのためにも進軍しようとなった。

ま、俺はあいつ・・・狭間(ハザマ)に言ったとおり桃香(とうか)たちを助けると決め
たからな

そして舞台は洛陽に移る

依頼編　第六話　なんだか人生の先輩キャラ化している（後書き）

恋姫編は次で終わる予定です

遅くなるかもしれませんが今後ともよろしくお願いします

依頼編　第七話　出る杭は打たれるもの

ーーーーー北郷一刀ｓｉｄｅーーーーー

洛陽に到着した俺たちはその現状に驚いた

「これは・・・・・・・・」

「酷い・・・・・」

目を背けたくなるほどあまりにも酷い有様だった

活気どころか生気すら感じないほどであり、家は無事なものがほとんどなく

ところところに死体が転がっていたりして、しかもまともな死体がほとんどないくらいだった

「なんで先生は、ここにいるんだろう」

「それを確かめるために此処へきたんだろう」

「そうだね。ご主人様」

俺たちが此処に来たのは最初は董卓を助けるためだったが、

ほかに桃香たちの先生に会うことも追加されていた

話に聞くと桃香や朱里たちにいろいろ教えてくれた先生で、頭がよくて、

桃香たちがここまで来たのも先生のおかげらしい、星たちの言葉からでも武術もすぐれているとか

それに桃香たちを心配して、主の俺たちを主としてふさわしいか試したりもしたらしい

人徳ある人だと星も感想を言っていた。

・・・・・・・それなんて完璧超人？

そんな人が此処にいるらしいので会って話しをしたいと、うまくいけば味方になってくれかもしれない

とゆう希望的観測をもってきたのだが、この惨状だった

そう思いながら、ある程度進んだとき、ことが起きた

「ご報告いたします！」

「どうしたんだ！？」

兵士の一人が慌てながらいった

「先程から突然、白装束を纏ったおかしな集団が・・・」

その言葉は最後までいうことはなかった

「グハッ！！」

「！！」

斬られたのだ。白装束を全身に纏い。僅かに出ている目はまるで人形のような者に

「いったいどこから！？」

その白装束は俺たちを包囲しながら

「北郷一刀、それに付いてきた者、そして転生せし者は世界を滅ぼす悪なり！

悪を滅ぼすは正義の責務なり！」

「ッ！！」

「おいおい、いきなり決め付けかよ」

「俺が世界を滅ぼす悪！？何言ってんだ、一体！」

そんなことを言ってきた、それに秀斗が反応したがそれは置いておこう

判ったのはこいつらは俺たちを殺しに来ているってことだ

「来るぞ！」

「ハアッ！」

「グアアア！」

ーーーーーザシュ！ーーーーーーーー

「・・・・・・・・・・」

「クッ」

ーーーーーガキンッーーーーーー

そうして戦いが始まったのだが、包囲されているため、相手が有利である

そして状況は此方は何とか闘っているが、それでもジリジリと押さ

れている
愛紗や星、そしてあいつ（御使いをさす）も先生とやらにもらった槍で闘っている
本当に危険になり始めたとき、
「やめろ」
その声に白装束は突然、攻撃をやめて道を開けるように並んだ
そこから出てきたは俺と同じ年頃のさっきのとは違う白装束を着て、顔を出している
どこか俺たちを見下しているような、そんな雰囲気を持つ男だった
「どうも、人形さんたち、僕はこの外史の管理者だよ」
「？・・・・あんたはこの白装束の親玉か？」
「ああ、そうだよ、でもすぐに君たちは消えるんだから」
「どうゆうことだ！」
「文字通りさ・・・・いらなくなった玩具は捨てるんだし」
「俺たちは玩具じゃない！！」
「いや、玩具さ。君たち以外は皆人形、できそこないの人形なんだよ」

「ふざけるなぁ！！」

そういいながらあいつが殴りかかるが、管理者の顔面に触れたと思った瞬間、

ーーーーーゴッーーーーー

「グッ！」

逆にあいつが吹っ飛ばされていた

「御使い殿！」

「あはははは・・・・判った？どうやっても僕には勝てないんだよ」

「貴様ーー！」

その侮辱に愛紗が怒り、管理者に切りかかるが

「・・・・失せろ、人形風情が」

「えっ？」

気が付くと管理者の足元に愛紗は倒れていた

「たかが人形程度が管理者たる僕に歯向かうとはふざけるにも程がある・・・・」

そういいながら愛紗の頭を踏みつけた

ーーーーガッ！ーーーーー

「グッ」

「愛紗！」

俺はそのことに怒り、管理者に殴りかかったのだが

「目障りだ」

「えっ？」

いつの間にか愛紗と同じように地面に倒れていた、それでも起き上がろうとしたが頭以外が動かない

そして顔を上げた視界には俺と同じように倒れている皆と愛紗を踏みにじる管理者の姿

「あっはははははははははははははははははははは・・・・・・

いいね！いいね！その怒りと絶望が混ざったその表情！なんだ、たかが人形風情でもなかなか

いい顔をするじゃないか！楽しいなぁ！人形の顔を絶望に染め上げ

るのは！」

そういいながら愉悦に染まった顔をしながら、踏みつける管理者

「ふざけんじゃねぇ！！愛紗は人形じゃない！！」

「そうだよっ！！」

それに怒り、あいつは声を出す。

「くくくく・・・・純粋な怒り一色の顔もいいね♪

そんな顔を絶望のどん底に叩き落して絶望に染め上げるのも最高にいいんだろうなぁ～

・・・・・・いいね、それ♪　よし、だったら・・・」

愛紗を踏みつけていた足を大きく上げ、ある程度の高さまでいくとそこで足を止め

力をためた。まるで処刑場のギロチンのように・・・・・愛紗を殺すつもりか！

「やめろぉぉ！」

「くそっ！動けよ！」

クソッ！あいつを止めようにも頭以外がまるで他人のものかのように動かない

俺には力がない。それは自覚していた。だが今以上に力がないこと
が悔しい！
そうもがく俺たちを管理者はとてつもなく厭な笑顔で見ていた
「さて、君たちの絶望をみせてもらおうかな～」
ーーーーゴォ！ーーーー
「「「愛紗（ちゃん）！！！」」」
管理者の足が下ろされた時、俺は目をつぶってしまった。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
そこからなんの音を起きなく、目を開けると
「・・・・・・・・・・・」
管理者の足を片手で止めている。男の人がいた

―ハザマｓｉｄｅ―

「・・・・・・・・・・・・・・」

「なんだい貴様は？せっかくいいところなのに邪魔してくれて、人形の癖に」

「先生・・・・」

屑が何か喚いているがこの際置いといて・・・・・・・

ひさびさに完全に切れた。教え子をここまで傷つけてくれたね・・・

私は完全に切れると黙るタイプと言われています

そいつに殺気を放つ。屑が私の殺気の強さに怯むが自分は管理者だと思い込んでるため

調子に乗っている・・・・・どちらが上か教え込まんとな

「・・・たかが人ぎょ「黙れ」ぶっ！」

ーーーーーバギィーーーーーー

屑が喋ろうしたが速攻で顔面を殴り飛ばす。歯が数本折れながら地面と水平に飛ぶ

だが更に追撃をかける

「グガァ！」

ーーーーーゴギィーーーーーー

そんな鈍い音が奴の背中から出る、なぜ背中かといわれると

殴った瞬間にμ（ミュー）ー13ーのアクトパルサー（瞬間移動）で奴の進路に移動し

奴が飛ばされている方向とは逆の方向に肘撃ちをだしたのだ。その結果だ

そして元に戻るかのように吹き飛ばされる奴

だが更にアクトパルサーで元の位置に戻り、飛んできた奴に

「燕返し！」

ーーーーーバギィーーーーー

棒と一緒に奴の腹へアッパーを打つ。棒と一緒に空中に上がる

そのまま萬天棒(まんてんぼう)が動き奴を叩き落した。

「ゴフッ」

ーーーーードゴッーーーーー

奴は血を吐きながら、地面に叩き落とされたが奴は口の血を拭いながら立ち上がった

だが奴の顔は怒りと苛立ちで埋まっていた。どうせ奴はさっきの燕返しで私が道術(どうじゅつ)を使えることに苛立ったのだろう。人形程度が自分と同じものを使うことが許さないのだろう

井の中の蛙大海を知らずか、上には上がいるってこと知らないのだろう

どうやら奴は動きを止める術を使ったのだろうが私には効かない

その事に奴は更に苛立った。「自分が上だ」とゆう優越感がないか

らなのだろう

出来の悪い中学生以下だな

「こいつをやれぇぇ！！」

ーーーーーバッ！ーーーーーー

その言葉とともに配下の白装束が襲い掛かってきた。今度は人に頼るのか

ますますダメだな。そう思いながら白装束は全員前に集中して襲い掛かっているため

「緑一色（リューイーソー）！！」

ーーーーーボォ！ーーーーーー

「ぐっはぁ！」

「ぎゃぁぁぁぁ！」

前方に人三人分の炎柱を出し、白装束をなぎ払う。どうやらうまくいったみたいで

全員戦闘不能にできたみたいだ。奴の顔は驚愕に満ちていた

「ふざけるなぁ！俺はここの管理者だ！俺に管理される人形に負けるはず無いんだ！」

空気が変るのを感じた。どうやらなりふりかまわずに全部の力を持って排除するつもりだが

「あいにくだが私にはそれは効かない」

その証拠に他の皆は気絶してしまっている

「嘘だ！！俺は管理者なんだぁああ！」

そう殴りかかってきた奴を足を使った棒突きで（ライチの６Ｂ）でカウンターで返す

「ゴフゥ」

ーーーーーメリッーーーーー

それが当たったのを皮切りにもはや闘いとは言わない攻撃が始まった

簡単に言えば原作でのコンボだ。

拳法と萬天棒（まんてんぼう）の同時攻撃で防御すら許さないほどの勢いだった

そしてそこには全身傷だらけの奴がいた。顔には悔しさなどが刻まれていた

「なんで！？なんでだよ！？俺が勝てないなんてなんでだよ！！」

どうやら奴の常識には管理者＝最強、無敵とゆう方程式があるらしい

・・・・・・・・・微妙にあってるからなんともいえない

「なら答えてやろう。その理由を」

「え？・・・・・・・」

「私が君たち管理者を管理する者だからだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

唖然としていた

「君の考えは管理者が管理しているものには勝てないと思っているのだろう？

そのとおりじゃないか、私は君たちを管理しているのだから君に勝つのは当たり前

そうじゃないのかい？」

「う、嘘だ！だったら俺たちが知らない訳がない！」

それに肯けば、管理者であるとゆう最後の心の支えが崩れるので必死に否定しようとする

だが、

「だったらここにいる人たちは君たちを知っているかい？

そして自分たちが管理されているか知っているか？知らないだろ。

それと同じだ

つまり君は管理者でもなんでもない唯の人間だよ・・・

何度も命令違反を犯しているから、始末してくれと言われていますから

これで管理者の介入はなくなったと言えるでしょう

さてトドメです

相手の後ろに回り蹴り上げで垂直に打ち飛ばす

ーーーーーガッーーーーーー

その後すぐに追いかけるように跳躍し、相手が頂点で静止する時、すぐ上で

「九蓮宝燈（チューレンポートー）」

蹴る！

目すら移らぬ速さで蹴る！

ーーーーードガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガーーーーー

その何度も何度も蹴られたことで全身の骨は砕け、肉は切れるのを通り越してミンチになっていく

そして数秒たった後、蹴りが止まり、力を溜め。最後の一撃を出して地面へ叩き付ける

ーーーードガッ！・・・・ドッ・・ズザザザザーーーーー

そして着地した目の前の地面には原型がない死体が出来たのであった

ー桃香ｓｉｄｅー

目を覚ますと目の前には倒れていた皆の姿が見えた。何故？と疑問に思ったところで

思い出した。不気味な白い装束に襲われて・・・・・・・そして

「愛紗ちゃん！」

振り向いた先にはご主人様たちも倒れていたが、愛紗ちゃんの容態を確かめる

「よかった～」

多少頭に怪我があったものの痕に残るものはなくて安心した

するとすぐ横に手紙が置いてった・・・・よく知った先生の文字であった

あの時先生が助けに来てくれたのは夢ではなかったんだ

でも、少しくらいはお話したかったけどもういないから仕方なく手紙を読み始めた

『桃香ちゃん達へ

この手紙を読んでいる頃には私はこの街にはいないでしょう。そちらに話があるようですが

それはできない。何故と言われれば

それは自分の力ではないからだ。自分の力ではない力で勝ち取った平和は偽りだ。

すぐに壊れて消えてしまう。だからこそ自分自身の力で成し遂げなければいけない

だからこそ私に出来ることはそっと背を押して送り出すことだよ。

愛紗ちゃんや鈴々ちゃんが桃香ちゃんの力になってくれている、それも桃香ちゃんの力だよ

それに朱里ちゃんたちだって私の優秀な教え子だ、助けになるってくるだろう

それに北郷君たちだっている。私がいなくても桃香ちゃんの周りには頼りになる人が

たくさんいる、それでいいじゃないか。

桃香ちゃんの思いに触れて、手伝おうと人が集まる。それが桃香ちゃんの力だ

だからこそ桃香ちゃんの思いのままに行きなさい。彼らもそれに応えてくれるのだろう

それが先生からの言葉だ

それと北郷君にこの手紙と一緒に置いてあるもの渡しておく。少しながらの手助けだ

狭間より』

手紙に書いてあったのは昔先生に言われたことだった

そんな先生の言葉を思い出しながら手紙に書いてあったあるものを探す

それはすぐそこに白い布に包まれた剣・・・・にしては少し小さいものがあって

開けると変った形の剣だった。興味が沸いて、抜いてみると

「綺麗・・・・・・」

それは愛紗ちゃんたちが持っているものとは違う美しさだった。

それの剣に装飾はなく、むしろそれすら邪魔だた言わんばかりの存在感をもった刀身があった

その刀身は今まで見てきたものよりも薄く脆く見えるが、それを上回るほどの鋭さを持っている

そして刃には後から付けたのではない紋様が入っていた

それらがなにか吸い込まれるような雰囲気を醸し出していた

それに見とれていた

「・・・・・・・・あっ！いけない、こんなことしていることよりもみんなを起こして

董卓さんたちのこと確かめなくちゃ」

まずやらなきゃいけないことがあるんだっけ

先生がいなくてもご主人様たちのためにもがんばらなくっちゃ！

そのあと、ご主人様がこの剣を見て、物凄く驚いていた。どうやら天の国の剣みたいだったらしい

「どうして彼がこれほどまでの刀をもっているんだ？・・・・」と言っていた

先生だしといったら、朱里ちゃんたちも納得していた

その様子に彼は一体何者なんだと言っいた

まだ先は長い・・・だからがんばらないと

依頼編　第七話　出る杭は打たれるもの（後書き）

これで恋姫編は終わりです

またやるとしてもキングクリムゾンが起きています

次はしばらく本編に入ります

本編　第四話　人間いろいろな顔を持っているのです

ーハザマｓｉｄｅー

あれから数ヶ月が経った

あの後私たちは紅き翼として活動して、いろいろなことがあった

戦いでは「グレート＝ブリッジ奪還作戦」では前線に出て活躍した

グレート＝ブリッジとは大陸と大陸を繋ぐ重要な橋であり、拠点である

それを奪還するための作戦は三桁以上の艦隊が戦った、激戦であった

その戦いでナギは味方から「千の呪文」といわれ、敵からも「連合の赤毛の悪魔」と恐れられた

詠春も「サムライマスター」と呼ばれている

無論私も「絶対零度」とか「無情なる白き仮面武者」とか・・・・・・

どこの厨二病だと言わんばかりの二つ名をもらったよ

絶対零度についてはジンのユキアネサによる煉獄氷夜（れんごくひょうや）であたり一面を凍らせたからだ

それになにやらナギのファンクラブが出来たそうだ。私やジャックのは前からあって

「ハクメンさまの素顔を見てみ隊」とやらが出来ているそうだ

なんだか危険な匂いがする

それに新しい仲間も増えた。ガトウとその弟子で探偵団をやっているタカミチ

戦争を終結させるために闘いを続けていて、あるとき戦場跡でナギがたそがれているとき

「なあ、俺の故郷にある旧世界じゃ超強力な科学爆弾が発明されてて、

こんな大戦はもう起こらそうだ。戦を始めたのが最後、みんなまとめて滅んまうからだってよ」

「戦略核のことか」

「ああ、それがお互いを抑えあってるらしい、だがこっちのこの戦はいつ終わる？」

「敵の首都を滅ぼすまでか？」

「やる気になりゃ、この世界にだって戦略核以上の大魔法だってある！

こんなこと続けてどうなる？意味ねぇぜ！！これじゃあまるで・・・・・」

ナギの言葉に継ぎ足すように

「まるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのようだ・・・・・ですか？」

アルが言った。ジャックはそのことに興味がないようで、ほうけている

「・・・・ある意味そのとおりかもしれないぞ」

その疑問に答えたのは

「ガトウか」

新しく仲間になったガトウ、少しに無精髭でスーツをきている

「ああ、ハザマ、頼まれたことが調べ終わった。だが、ここまでひどいものとは思わなかったぞ」

「どうゆうことだ？」

ナギが疑問に思う

「少し前に気づいたのだがこれほどまでの戦いを続けているのに両国とも戦力が低下しないのが

おかしいと感じて、どこからか裏から操る奴がいるかもしれないと

思って、ガトウたちに

頼んで調べさせてもらったのだが、どうやらその様子だとクロだな」

いくらなんでもあれほどの戦いを繰り返していけば両方とも疲労しないはずがない

なのにどこからか戦力が供給していのをきな臭く感じ、頼んで調べさてもらった

「そうゆうことだ、ひどいことに両国の中枢まで入り込んでいて、そいつらが黒幕のようだ

その名前は秘密結社『完全なる世界（コズモエンテレケイヤ）』だ」

「そうか、ガトウ、礼をいう」

「ようするにそいつらをぶっとばせばいいんだな」

倒すべき敵を見つけ、やる気を取り戻したナギであった

そのことがわかってから数日後、
私たちはガトウに呼ばれて、ナギ、詠春、ジャックと共に首都に来たときのこと
「なんだよガトウ、わざわざ本国首都まで呼び出してさ」
「あってほしい人物がいる、協力者だ」
「協力者？」
協力者？
「そうだ」
そこにいたのは
「マクギル元老院議員！」
そこにた老年の男性は私たちを支援してくれている数少ない人物だ
「何故此処にあなたが？」
「いや、わしは違う。主賓はあちらのお方だ」
こちらへローブを被った人物が向かってきた
「ウェスペルタティア王国・・・・・・アリカ王女」

そうして姿を見せた、腰まで届きそうな金髪で目は鋭く
彼女の雰囲気はまさに王族然としていて、目にまっすぐなものを宿していた
・・・・・いい目だ。彼女に対する最初の感想はそう思ったのであった
依頼でよく相手の目を見ることが多く、いつの間にかこうゆう会談なのでは
ついつい相手の目を見て判断してしまう、目は口よりも物をゆうと言われてるし
ほとんど外れたことはない、もはや職業病に近いものである
「・・・・・・・・・・・・・・」
対面した途端、ナギは黙ってしまった。・・・・おそらく一目がつくホの字かね
「へー、あんたがアリカ王女様ってか」
ジャックが話しかけると
「気安く話しかけるな、下衆が」
と予想外の言葉をもらってしまった
「っんだと！」

「ジャック、落ち着け・・・アリカ王女、貴公も王族の沽券に関わるとはいえ言い過ぎだ」

とりあえずジャックたちを諌める。たしかに馴れ馴れしく話しかけられるは

上に立つものとしての沽券が関わるといってもさっきのはないと思う

「ちっ、わかったよ」

「・・・・・確かにそうであったな」

両名とも落ち着いた、それにしてもアリカ王女はなんとゆうか悪い意味ではないが

自尊心とゆうかプライドが高く感じる。それが王族の誇りなんだろうか。それは置いといて

「さて、どうして王族たるアリカ王女が此処にいるか、訳を聞かせていただこう」

「・・・・・貴様たちに助けを求めにきたのだ」

「どうゆうことだ？」

「私はこの戦争を終わらせたい。だか、私一人の力ではどうにもならない

だから、そのために貴公ら『紅き翼（アラルブラ）』の力をかりにきたのだ」

彼女も私たちと同じように戦争を終結させるために動いているわけかけれども彼女一人の力では達成することが困難になっている。
だから同じように戦争を終わらせるために動いている私たちに協力を請いに来たのか
「用件はわかった、なら聞こう、何故戦争を終結させたいか、その理由を聞こう」
私のなかで一番気になることは何故、何のために戦争を終結させるかだ
「・・・・・・わが国の民のためだ。」
「ほう」
「ウェスペルタティアは『連合』と『帝国』の間にあり、翻弄され続けている
このままでは滅ぶ。それだけは避けたい。国を治めるものとして民のためにも
戦争を終結させたいのだ、だから力を貸して欲しい。」
その言葉とともに彼女は頭を下げた
「なっ！？」

その突然のことにマクギル議員は驚いている。一国の王女が頭を下げたのだから

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

ほんの少しの間、私とアリカ王女の間に沈黙が流れる

頭を下げている彼女には本当の気持ち・・・覚悟を持つものの雰囲気があった

それを見た私は、外に出ようと振り返る

「おい！」

「待っ「ハザマだ」・・・えっ？」

静止をかけようとしたアリカ王女にかぶさるように名前を言う

「私のことをハザマと呼べ。それが本名だ」

「えっ？」

「おっ」

「それはどうゆうことだ？」

「なに、貴公の意思を見て、決めたのだ。私個人でも協力しようと・・・・

だから少し急いているかもしれないが、すぐに変装して調査に行くところだ

そうゆうことだ。本名を名乗ったのはこちらの信頼だ。ナギたちはどうする？」

「俺も姫さんに協力するぜ！」

「そうゆうことだ、ナギ。後は頼むぞ。これから独自調査に行く」

「調査って・・・・それじゃあすぐにばれるんじゃないか？」

ナギの疑問はもっともだが

「なに、私もいつもこの鎧をきているわけではないのだよ」

流石にこの格好じゃ目立ちすぎているからな、有名になったのも入っているし

だからプライベート用の変装をしているのだ

「あ。そっか。そうゆうことか」

「そうゆうことだ、ではここに滞在している間は独自調査をする。詠春、ジャックもいいか」

「ああ、いいぞ」

「俺も別にかまわんよ」

仲間からの許可も出たし

「では、いってくる」

そうして私はここをでた。その後ナギとアリカ王女がなにやらあったようだが関係ないことだ

ｓｉｄｅｏｕｔ

そのまま『紅き翼（アラルブラ）』はメガロセブンに休暇となり。

ナギ、ジャック以外のメンバーは独自調査に向かった。『完全なる世界（レケイヤ）』（コズモエンテ）についてだ

だが、最初は国際マフィアか死の商人・・・・・いわば「戦争があれば儲かる奴ら」と

ゆう奴らだと踏んでいたところが、調べても俄然謎のままであった

その休暇中のある一場面のこと

そこはおそらく彼らの海沿いの別荘でのこと

「まさか・・・・こんな・・・」

ガトウが調査の途中結果の結果に頭を悩ませているときにジャックが偶然入ってきた

「よお、ガトウどうしたい。深刻な顔をして」

「ああ、ラカン。いや、遂に奴らの真相に迫るファイルを手に入れたのだが・・・

これがどうにも信じがたい内容でな、いや、情報ソースは確かなんだが・・・・う～む」

そう言いながら調査の結果が予想外のことに悩んでいる

「信じていいのだか悪いんだか・・・・・・しかしこれが確かなら奴らの行動も・・・」

「んだ、ガトウ、ハッキリしねぇな、もっとわかり易くいえや」
その様子にウンザリとした表情でわかり易く説明してくれといった
「いや、言ってもあんたにゃ興味ない話だよ、多分・・・・・・・
それよりもこっちのほうが深刻だ。この男にも『完全なる世界(コズモエンテレケイヤ)』との
関連の疑いが出てきた・・・・・大物だぞ」
そしてガトウはある一枚の書類をジャックに見せる
「こいつは・・・・」
ジャックはその書類に書かれている人物をみて
「今の執政官(コンスル)じゃねーか!!このメガロメセンブリアのナンバー2
までもが
奴らの手先なのか!?」
実質ここで二番目に権力をもつ人物に奴らの息がかかっていること
に驚いていた
「確証がない、外で喋るなよ?」
ガトウがジャックに口外しないように注意した直後
ーーーーーズズンッ!!ーーーーー

「！？」

「何だ！？」

爆発音が海を挟んだ対岸の街で起こり、火災が起こった

その爆発の直後、所変ってその現場

ーーーーーゴオオオオオオオオオーーーーーー

急な爆発と火災により周囲の人々がパニックになっているなか

「大丈夫か、姫さん」

「うむ」

ナギたちはこのことに巻き込まれて、いや

「くそっ！こんな街中でデカイ魔法使いやがって。死人出てねぇだろうな」

「やはり、今のは・・・・」

「ああ、奴らの刺客だろ。俺とアンタ、どっちを狙ったかは知らねぇけどな」

巻き込まれたのではなく、襲撃されたのだ、だがナギもただでは転ばず

「けどようやく尻尾を出したな。逃がさねぇぞ！！追尾魔法をかけてやったぜ」

してやったりといった表情で言ったのだった

そう、咄嗟に追跡用の魔法を掛け、襲撃者の本拠地を割り出したのだ

そしてナギがそこへ行こうとしたとき

「よしっ、姫さんは皆のトコ帰ってろ。俺は奴らの本拠地をぶっ潰し・・・・グェ」

アリカ王女に帰還を促して、ナギは敵地に行こうとしたがアリカ王女にローブを?まれ

引止められてしまった。ついでに引き止る際にちょうどよくローブがナギの首に締まってしまって

ため、「グェ」なんて少々情けない声が出てしまったが

「・・・・・・私も行こう」

「ああ?」

アリカ王女の突然の提案に驚き

「ここに私を一人残しておく方が危険だとわからぬか、愚か者が。それに私の魔法は

役に立つぞ?忘れたか鳥頭」

そうアリカ王女が毅然とした表情でナギに向けて言った

「・・・・・・・・」

ナギはその言葉に少しの間、唖然・・・とゆうよりもすこし呆けたような表情をしたが

「ハッ・・・いいぜ、姫さん。ついてきな！！」
仲間として認めて、戦友(とも)として頼りにしている顔をした
が

「少々待ってくださいよ、ナギさん、アリカ王女様」
偶然にも狙ったかのように水を差すかのように横からオールバックにした白髪にパナマ帽、
そして糸目に飄々、いや蛇に近い雰囲気を持つスーツを着た男が声を掛けた
「・・・・なんだよ、てめぇ誰だよ」
「そうじゃ、いきなり馴れ馴れしく話しかけるな」
ナギたちもせっかくの流れを止められて少しばかり不機嫌になっていたが
「ああ、お二方とも落ち着いてください・・・あ、この姿で話すのは初めてでしたか」

「なんで俺たちを知っているんだ？」

「？？」

「私（わたくし）ハザマですよハザマ・・・この姿でははじめましてでしたっけ」

そういいながらハザマは帽子を手にとり、礼をした

「「はああ！！？？」」

ナギたちも彼がハザマであることに口をポカンとして驚いていた。

それは彼がいつもはハクメンの堂々した格好をしており、どこか寡黙なイメージを連想していまう

姿であったから、彼のこの飄々した姿が意外以外のなにものでもなかったのだろう

「とゆうことで私も連れてってください、今の姿では少々戦闘力は落ちますがそれでも十分すぎる

位に戦えますし、代わりに諜報員としてはガトウと同じ位のことは出来ますから」

「あ・・ああ、わかったぜ」

「う・・・うむ、よかろう」

どうやら彼がハザマであることに驚きがまだ引いていないようだ

「ありがとうございます・・・・ああ、後この姿のときはテルミと読んでください

それがこの姿の偽名ですから。ちなみにこの顔も素顔ではないのであしからず」

「・・・・ってその顔が素顔じゃないかのかよ！」

「ハザ・・・・テルミよ、その口調をやめぬか、どこか馬鹿にした感じがあるぞ」

ナギはいまの顔が素顔でないことに突っ込み、アリカ王女についてはその口調が少々気に入らなかった

「アリカ王女様、それは無理なことであります。何故かこの姿をするとどうしても

この口調になってしまうのでして、そこはご了承ください」

「そうか・・・まあいい」

「さて、テルミが来たことだし、改めて敵の本拠地に乗り込むぞ！」

そのあと、ナギたちは少しばかりボロボロになったがさまざまな証拠を確保し、

朝に帰ってきたところに詠春が説教をしようとしたが、アリカが礼を言ったことで

怒るに怒れなくなり、プルプルと震えたり。まだテルミの格好をしていたハザマを

「誰？」と聞かれて、ハザマです。といったところに飲んでいたジャックが吹き出す位の

衝撃を受けたり、あまりの驚きにタカミチが固まっていたりした

ついでに敵基地襲撃の際に、ハザマがウロボロスとバタフライナイフによる戦闘術に

ナギが「どんだけいろんなこと出来んだよ」ともらしていた。実のところ、詠春と同じように

ハザマも家事などもやっていたのだった。あの鎧姿で料理しているところは

ものすごくシュールな光景であった。

本編　第四話　人間いろいろな顔を持っているのです（後書き）

ネギま！本編にはいるのは少々時間がかかります

作者のプロットでは本編中ではハザマは少々自重してしまうので

なので過去編でかなり活躍させます

代わりに自重しない人が出てきますけどねw

本編　第五話　人生、万事塞翁が馬に似ていると思う

ーーーーハザマｓｉｄｅーーーーー

さてと、あの後にアリカ王女が秘密裏に帝国の第三皇女と接触しに行ったところを

ナギたちが見送りに行って、アリカ王女とナギが二人で少し話しをして、

戻ってきたときにナギの両頬に赤い赤いもみじが出来ていたのをジャックが爆笑しているのを

背に私たちは見送った後、ガトウが元老院議員と連絡していた

「・・・・・・・・執政官・・・・・・関与！？

・・・・ヴァンデンバーグ・・査官」

電話なので元老院議員の声が少し漏れて聞こえる

「ハ、確たる証拠があります」

あの敵基地襲撃の際、ナギが大暴れしていたそばで、証拠をかき集めたからな

「よく・・・・・・・いけば・・・・・・・・無意味・戦線・・拡大を・・・・・・・かもしれぬ」

僅かながら聞こえてくる言葉でどうやらうまくいけば戦争を抑えることが可能もしれないらしい

「弾劾・・・・法務官を呼ぼう・・・・・・・・・・・の品とナギ君たちを・・・・・・・」

「了解しました。では」

ガトウは電話を切り、こちらに振り返り

「明日、執政官を弾劾するためにマクギル元老院議員のところに赴くことに

なった、証拠を確保したナギとハザマも同行してもらうことになったぞ。いいか？」

「別にかまわんよ」

「ああ、いいぜ」

そうして、私たちはマクギル元老院議員のところに行くことになったが

だが、そこで思いも知らぬことになってしまった

次の日、マクギル元老院議員の所にて

「マクギル元老院議員」

ガトウは彼に呼びかけ、彼は窓の方を見たまま、つまり私たちに背を向けたまま

「ご苦労。証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ・・・・・・・法務官はまだいらっしゃいませんか。」

「法務官は・・・・・来られぬことになった」

「・・・・・・・・・ハ・・・・・？」

・・・・・元老院議員の様子がいつもとなにか違和感がある。

目だけを動かすとどうやらナギも元老院議員に対する違和感に気づいているみたいだ

元老院議員に成りすまして私たちを騙まし討ちの可能性も考慮していつでも

短剣型のソードサマナーをコンマ三桁の速さで出せるように用意する。特訓によって使い勝手がよいの

をさらに使いやすくしたもので今までのは射出するだけだったが、今度は手の甲から出して、

剣にしたり指の間から短剣を出して、斬ってよし、投げてよしの万能型に変った。

よくジャックの『千の顔を持つ英雄』が最強のアーティファクトと称されているが

その理由がよく解った。それを待機しながらガトウと元老院議員の会話を進める

「あれから少し考えたのだがね。せっかくの勝ち戦だ。ここに来て・・・・・・

慌てて水を差すのも、やはりどうかと思ってね」

「ハァ」

そう相槌を打つガトウを余所にナギに視線を向ける。こうゆうときハクメンの仮面のお陰で

悟られずに済むのがいい。アイコンタクトで密かに会話をする

「（ナギ、わかっていると思うが）」

「（ああ、あのおっさんの様子がいつもと違げぇ、もしかすると）」

「（あの連絡の間にすり替えられたかもしれん、もう少し見よう。ナギも動けるようにしてくれ。）」

「（わかったぜ。）」

そう決めて、ナギともに元老院議員を観察する。元老院議員は半分振り返り

「いや・・・その、私の意見ではない。そう考える者も多いということだ。時期が悪い

時を待つのだ。君たちも無念だろうが、今回は手を引いてだな・・・」

こちらを見たときの目で、私は確信に至った。目で合図をする

「（ナギッ！彼、いや奴は）」

「（ああ！）待ちな」

「？」

「あんた、マクギル議員じゃねぇな。一体何もんだ？」

ーーーーボゥン！！ーーーーー

ナギのその言葉とともに元老院議員が炎に包まれる。ナギが無詠唱の火の魔法を使ったからだ、そこに

「シッ」

ーーーーーシュパッーーーーー

私が更にソードサマナーを使って、両手の指の間から出した短剣を炎の中の人影に投擲、

いや射出し追撃を掛ける

「「な！！？？」」

ガトウとジャックが私とナギの突然の元老院議員への攻撃に対して驚きのあまり

唖然と口を開けていた

「ちょーーーー！？　ナギおまっ・・・・ハザマも何やってんだよッ！？」

「二人とも！？元老院議員の頭、いきなり燃やして！？おまっ・・・・・」

「バーーカ。よく見てな、おっさん」

「そうだ、ジャックもガトウも気づかないとはな」

「何！？」

ガトウが更に驚き、火の方を見ると、だんだんと火が散っていきそこには

「よくわかったね。白き仮面の者に千の呪文の男。こんな簡単に見破られるとは

もう少し研究が必要なようだ」

私と同じような白い髪とすこし笑って見えるがまるで人形のような感情がない男がいた

「本物のマクギル元老院議員は残念ながら、既にメガロ湾の底だよ」

ッ！！・・・・まさか、そうゆうことか！

「てめぇ！」

ナギもその言葉の意図に気づき、奴に殴りに行くが突然現れたマントを着た二人が

「くらえ」

「通しませんよ」

ーーーードンッ！ーーーーー

ナギに炎と水の攻撃をしたが

ーーーーーザシャァーーーーー

「強ぇぞ、やつら！」

ナギは咄嗟に後退して避けたのだ。その後にさっきの攻撃の余波の水がこちらに流れてきた

「ハッハ。だが生身の敵だ！政治家だ何だとガチ勝負できない敵に比べりゃ、」

ジャックは自分の背よりも大きい大剣を肩に担ぎながら

「万倍！！戦いやすいぜ！」

嬉々としていった。ジャック、だから皆からバカって言われるんだぞ

「フ・・・・」

む、白髪の敵が電話をするように手を耳に持っていく。どこかにでも連絡するのか？

いや、この戦闘でそうゆうことをする暇なんてないはずだ。何故に？・・・・・そういえば奴は

マクギル元老院議員になりすましていたな。・・・・・元老院議員・・・・・・

ッ！！！まさか！奴の狙いはそれか！！

「させん！」

もはやなりふりかまわずに奴の腕を落とそうと剣を射出するが

「甘いよ」

逃げ場の無い様に射出したが奴にあっさりと避けられ

「わ、わしだ！　マクギル議員だ・・・・うむっ、反逆者だ！

ああ　うむ　確かだ

奴らに暗殺されかけたっ・・・は、早く救援を頼むっ！　スプリング

フィールド、ラカン、

ヴァンデンバーグ、ハクメン、奴らは帝国のスパイだった！やつら

の仲間もだ！

今も狙われている。軍に連絡を・・・」

しまった。阻止できなかったか。

「げ！」

「やられたな」

ナギたちも気づいたみたいだ

「「おおおおお！」」

ーーーーーダッ！ーーーーー

そんなもんかまわずに突っ込む二人。

「ガトウ」

「なんだ、ハザマ」

「これから突っ込んで二人の援護と注意を逸らすから詠春たちに連絡と退路の確保を頼めるか？」

万が一が起こってしまったために逃げ道を確保しないと

「ああ、解った。気を付けろよ」

「ああ」

それを言い。先に行った二人に追いつくように鬼蹴（きしゅう）を使って追いかける

それと同時に白髪の奴が手をナギたちに向け

「君たちは少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

ーーー

「まさかこんなことになろうとはな」

「だねぇ。昨日までの英雄呼ばわりが一転、反逆者か。ヌッフフフ、いいねぇ。

人生は波乱万丈でなくっちゃな♪」

「ジャック、前向きなのはいいことだがもう少し緊張を持て。」

「・・・・・・・姫さんがヤベェな」

「ナギ、まずは自分たちの安全を確保することだ。アリカ王女の心配してナギがダメになったら

それこそ本末転倒だぞ」

「わかったよ、ハザマ」

とにかく泳いで連合軍から逃げることが先決だ

ｓｉｄｅｏｕｔ

――――――

「何だ、これが噂の『紅き翼(アラルブラ)』の秘密基地か！
どんな所かと思えば・・・・・掘立小屋(ほったてごや)ではないか」
テオドラの言葉にジャックが
「俺ら逃亡者になに期待してたんだ。このジャリは」
額に井のマークを付けながら言った。あえてそうゆう風に作ってあるが、そう見も蓋も無いような
言われ方すれば少々怒るのも無理はなかろう
「何だ貴様！　無礼であろう！」
「へっへ～ん、あいにくヘラス皇家には貸しがあっても借りはないんでな」
「何ぃ？貴様、何者だ」
一見いがみ合ってるようだが、はたから見ればじゃれあっている二人
「あのやけに元気な少女が・・・・」
「ええ、ヘラス帝国第三皇女です。アリカ姫との交渉の為、出向いた所を一緒に敵組織に
捕捉されていたのです」

そんなじゃれあっている二人とそれを見ているアルビレオと詠春
その近くでナギたちは
「さーて、姫さん。助けてやったはいいけど、こっからが大変だぜ。連合にも帝国にも・・・・あんたの国にも味方はいねぇ」
ナギの言葉に続きガトウが
「恐れながら事実です。王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況で・・・・・
最近の調査ではオスティアの上層部が最も『黒い』・・・・とゆう可能性も上がっています」
「ガトウ。こっちの独自の調査でもかなりの量が出ているぞ。ほんとに殆ど黒しかないほどにな」
ガトウが確証をつけ、ハザマがそれを補足した
「そうか・・・・・・・我が騎士よ」
「だから。その『我が騎士』って何だよ。姫さん。クラスでいったら俺は魔法使いだぜ」
アリカ姫の『我が騎士』とゆう言葉にナギが反応して顔を真っ赤にして答える
恥ずかしいのだろう。だがアリカ姫は『我が騎士』しか言ってなく

ナギを決して指していなのだが

まあ、そこを突っ込むのは無粋とゆうものである

「もう連合の兵ではないのじゃろ？ならば、主は最早私のものじゃ」

「な・・・・・・」

暴論であるがなにか反論できないような力があった

「連合に帝国、そして我がオスティア・・・・世界全てが我らの敵という訳じゃな

じゃが・・・・・主と主の『紅き翼（アラルブラ）』は無敵じゃろ？」

アリカ姫は此方を振り替えながら微笑む。完全なる信頼の笑みだ

「世界全てが敵ーーーーーーー良いではないか。こちらはたった八人。

だが最強の八人じゃ。」

アリカ姫はナギに向かって、決意の言霊を口にする

「ならば我らが世界を救おう。

我が騎士、ナギよ。我が盾となり。剣となれ」

その言霊を前にナギは

「・・・・・・・・・・へ、だから俺は魔法使いだっつーの

やれやれ、相変わらずおっかなぇ姫さんだぜ」

ーーーーーザッ・・シャラン・・・・・・・スッーーーーー

皆が見ている中、片膝と片手を着き、アリカ姫の抜いた剣を肩に誓いの言霊を口にする

「いいぜ、俺の杖と翼。あんたに預けるぜ」

その直後に日が上る。その日差しはまるでナギを騎士として祝福するかのように照らされていた

その日差しに照らされた二人の姿はまるでおとぎ話にあるような。

幻想的な光景だった

ーーーーー

そのことにより徐々に味方が増え、ナギやジャックたちは敵を倒していく

そのほとんどが『完全なる世界(コズモエンテレケイヤ)』の息がかかっているマフィアや役人だ

でもそれらは『完全なる世界(コズモエンテレケイヤ)』でも末端の末端であるが

確実に数を減らしていった。

まさに死闘といっていいほどの戦いを半年近くも続け。遂に『完全なる世界(コズモエンテレケイヤ)』の

本拠地を突き止めたのである。その場所はアリカ姫の故郷であり世界でも最古の都、オスティア

その空中王宮最奥部の『墓守り人の宮殿』。調査によってその上層部がもっとも癒着がひどかった

ためだろう

そこで途中で仲間になった連合・帝国のアリアドネー混合部隊とともに

最後の決戦が行われようとしていた

本編　第五話　人生、万事塞翁が馬に似ていると思う　（後書き）

次回は対創造主

最強の敵なんでアストラルヒート祭りになる予定です

十万アクセス記念　番外編　世界さんの日常（前書き）

この小説も気づいたら十万アクセスでした

その記念に世界さんの日常をどうぞ

十万アクセス記念　番外編　世界さんの日常

ここでハザマの上司である世界さんの人間にたとえるならば日常であろうものを紹介しよう

ＡＭ：～９：００にあたる部分、私室に当たるところ（プロローグでの場所）

世界さんは此処で睡眠に当たる時間を世界（自身の中）の観察をして過ごしている

「・・・・・・・・ここはこんな風になるとは予想外でしたね。多くのところでは

核やらなんやらで地球滅亡が主だったのだが、まさか人類になりえたかもしれなかった

使徒とやらが出てきて最後には十字架が乱立する赤い海となるか。

海も汚染やらで黒くは

なるけど赤くなるは珍しいことだな。最後にはこの世界、ハザマのところでは物語か

その主人公とヒロインが新たな神話のアダムとイヴとなりうるかもしれないか。なかなかよかった

ハザマが確かエヴァ○ゲ○オン劇場版と洩らしていたかな

さてと・・・・仕事を始めますかな、。」

そうして世界さんの日常は始まる

ＡＭ９：００～ＰＭ：７：００にあたる部分、仕事の時間　仕事場

いつもどおりの世界さんの仕事が始まる

「さて、今日も仕事しますか」

この時間における世界さんの仕事は調整である

「・・・・・・・むぅ、この世界ではうまく持たせるには原因自体を抹消しなければいけないか

そのためにやりたくないが原因そのものとその周囲を消滅しなければいけないか、止む無しか

・・・・・・出来るだけ血を流したくないのだがな。・・・・・・は、それらのことがハザマに影響されているかな。」

そうやって自分のことにすこし苦笑いしている。だが悪くないと思っている世界さんであった

「守護者も人手不足だし・・・そういえば、どこかで新しく契約した人間が守護者になっていたな。

よし、そいつを派遣しよう。たしか名前はエ・・・エミ・・・・・・なんだっけ？まあ、いいか。

これで実行されればこの件は終わり。ハザマを動かなくてもいいだろう。

・・・・どっかにハザマくらいの人材いないかな。ハザマ一人だと

効率悪いし。」

そう実は人材不足で少し困っていた。とある理由で世界さんは直接干渉がしづらく。

直接干渉するより誰かを派遣して、派遣した人物のサポートのほうが遥かに効率がいいのだ

それでも、派遣した人物でも対応できないこともある。だがハザマはそんな無茶ぶりを

全てこなしてきたのだ。たとえば『逆立ちで世界一周をしろ』位の無茶ぶりを難なくとは言わないが

ハザマはそれらをこなしてきたのだ。其れ位の人材なのだ。世界さんは探しているのだが

すぐにでも見つかりそうなのだが見つからなくて、困っていたのだ。

「まあ、ないものねだりしても仕方ないか。えーと、次は・・・・・これは直接干渉しなくてもいいか

ここは少々運を操作すれば解消しますし」

世界さんの干渉には二通りの方法がある。間接型と直接型だ。

間接型は運みたいな実際には目に見えない科学的にも観測できないものを操作して

干渉するのである。主に物語の主人公の運がいいのはこれである（

中には素でもいいものがいる）

欠点は人間やらの物質やらには干渉ができないことである

次に直接干渉型。これは世界さんの力の一部を直接使って干渉することである

月姫の真祖の最上位版と考えてもいい。これは絶対に勝てる技でもある。でも滅多にない

守護者などは厳密に分類すると直接干渉ではなく間接干渉に当たる。なぜなら、その干渉する人物を運やなにかを最大限に強化しているためである

欠点はその世界の許容量を無視している為に下手を打てば干渉する前よりも悪化する可能性がある

「これも終わり。次はと・・・・・・またか・・・・・・・」

そう言いながら、電話を取り出しす

「ハザマ？聞こえている？また～～で違法転生者が発見。ただちに対処して・・・・・・

・・・・・これで三百件目だって？ようやく君を見つけて対処できるようになったら

わんさか出てきた。まだ出てくるかもしれないからよろしく頼むわ。

ん？お疲れ様です？此方がねぎらうのにまさかこっちがねぎらわれるとわ。ありがとう

そちらも仕事がんばれ。・・・・・さて～～をささっと調整して、次はと・・・・・」

そうして仕事を処理していく

ＰＭ：７：００～ＰＭ：９：００にあたる部分。

主にこの時間は勝手に規則、不正転生者を送り込んだ『神』を処罰するところである

「さて、言い訳を聞こうか」

そして今は不正転生者を送った『神』の一人を糾弾しているところである

「他の『神』だってみんな送っているじゃないか！！そうゆうあんたもだって！ゴフゥ」

彼の言葉が途中で途切れたのは世界さんが彼を踏みつけて止めたからだ

「私はちゃんと言いましたよ。転生者を送って暇を潰したいのなら。ちゃんとした手続きをして

から送りなさいと。本来記憶を持ち、能力を付加された転生は世界にとって大きな負担になるのです

だから送っても負担がないように人選から始まり、負担がかからないように専用の世界を

細心の注意をもって調整しているから安心して送れるのです。だからこそ手続きが必要なのです

私だって部下にしている転生者だってきちんと手続きを通していますし。」

さらに世界さんが『神』を踏みにじる

「さてあなたは規則を守らずに転生者を送りましたね？では罰を受けてもらいましょう

いままでの『神』にもやってきたものです。消滅なんてしませんよ。
それでは生温いですかね
罰は他の世界で人間として転生してもらいます。そして『ある事』
を成し遂げるまで『神』には
戻れませんしそれに私が能力を決定させていただきます。」
『神』は「消滅はしない」という言葉に少しホッとしたがその後の
「生温い」に顔を青くする
「転生する世界は此方がランダムに選ぶとして。貴方の能力につい
ては」
世界さんはそれを見せる。Ｆａｔｅ風で

筋力　Ｅ　　魔力　Ｅｎｐｔｙ
耐久　Ｅ＋　　幸運　Ｅ－－－
敏捷　Ｅ　　宝具　Ｅｎｐｔｙ

保有スキル

不幸：ＥＸ

このスキルはいくら足掻こうが絶対に運が向くことがないマイナススキルである

ランクＥＸならば金を得た数時間で失くし家を手に入れれば、その数日以内に壊れ

その土地に住むものならば一年以内に追われる

事を成そうとしても絶対というほど叶わない。

人と付き合おうものなら。その人も不幸になるほど。もはや概念の域まで達している

唯一の救いとしてこれに関わった後の人は『黄金律：Ｃ＋』が付き、幸運が最低Ｂ－以上になる

実際はスキル取得者に関わった者が幸運になるのを

見せ付ける嫌がらせ以外のなにものでもない

悲恋：Ａ＋＋

これをもつと恋愛が必ず悲劇となるマイナススキル

メリットがまったくない

これに関わったものはのちに最高の恋愛が起きる

これも嫌がらせである

存在継続：ＥＸ

どんな状況になろうとも生き残るしぶとさ。

だがこのスキルはただ『意思と肉体をもって存在している』だけなので、

五体満足で生き残れるわけではない。しかも意識が残る為に植物人間にもなれない

このスキルは『不幸』よりも優先される。ＥＸなら核弾頭が直撃しても『ぎりぎり』生き残れる

これも実際は嫌がらせ専用スキルである

「これで決定です。それに今までの『神』もこのスペックで転生しているのでいくら喚こうが
変更はできませんのであしからず。」
「ま、待て。なんで俺がこんな最悪のスペックで転生しなきゃいけないんだ！？」
あまりにもひどいスペックに納得できないのか抗議する
「それが規則ですから、世界の好きに出来る『神』だからこそ、守らなければいけないところは
守らなければいけないのです。今までは何の影響もなかったからいいのですが最近になってから
は無視できない問題になってきましたので。罰が追加されたのですよ。まあ私も一回これを
味わいましたよ。感想としてはもう二度とこんなことしないと思えましたし。」
世界さんは昔のことを思い出し苦笑いをする

「そういえば、バ〇オ〇〇ードの世界に転生したものは確か
バイオハザードの第一感染者→完全にゾンビ化せず意思だけある死体化→何度も攻撃される、
何故か痛覚が残っているのか痛みが来る。でも死ねない→やがてタイ〇ン〇化。ありえない確立
でなった。→ア〇〇〇ラに捕獲され実験体→自由意志を奪われるが意識は残る。『存在継続』で
あるための恩恵、でも『不幸』がでる
この先は知りませんが。ちなみに『ある事』とはその時々で常に変わります。でも現在の状態でも
できることになっているので。あ、そろそろですね」
「まっ、待ってく「もう時間ないのでは逝ってらっしゃい」い、嫌だーーーー！」
『神』の真下に黒い穴が出現してその上にいた『神』は落ちていった
「さてと、これで処理する『神』は今日はこれで終わりと・・・」
そうやって世界さんは規則を破った『神』を処理していく

ＰＭ：９：００～ＰＭ：１０：００に当たる時間

この時間は世間では休憩に当たる時間

世界さんはそこで正式に転生した転生者たちの活躍を見て楽しんでいる

「・・・・・・・あっはははははは。まさか此処で最強系オリ主がラスボスに

「ねぇねぇ。今どんな気持ち？コケにされながら何も出来ないことにどんな気持ち？ねぇねぇ？」

と言いながら片手でボコボコにしていますね。これは笑いましたよ。
ははは」
世界さんは休憩の間に転生者が原作ブレイクと言ったものを見るのも好きなんです。
趣味として世界鑑賞というくらい
「む？・・・・・此方の世界ではハーレム目指して頑張ったもののヤンデレ化して
ＢＡＤＥＮＤとなったか。」
そんなこんなで時間が過ぎていく

ＰＭ：１０：００～ＡＭ：０：００はＡＭ９：００～ＰＭ：７：００と同じように仕事である世界の調整に費やし

「これで今日の分の仕事も終わり。世界観察でもしようかな。」

その後のＡＭ：９：００までの時間は人間では睡眠と同じように世界観察をして

いつもどおりの世界さんの日常は終わる

本編第六話　本当の強敵って意外な所で出てくるよね（前書き）

どうも作者のＳＵＭＩです。

リアルの事情が重なってしまい投稿が遅れてしまったことにすいません

それと長くなってしまい二つに分けることになりました。

予告で言っていた祭りもありません。

アストラルヒートも一つしか出ていませんですし。ごめんなさい

それでもこの拙い作者の作品を見てくださってありがとうございます

では本編をどうぞ

本編第六話　本当の強敵って意外な所で出てくるよね

王都オスティア空中王宮最奥部「墓守り人の宮殿」前にてナギたち
『紅き翼（アラルブラ）』と
帝国・連合アリアドネー混成部隊と共に『完全なる世界（コズモエンテレケイヤ）』との決戦の準備に入っていった。
そこの前にいるナギたちは「墓守り人の宮殿」を目の前にして英気を溜めている
ナギが「墓守り人の宮殿」を睨みながら
「不気味なくらい静かだな。奴ら」
自身の後ろに構えている軍勢に対して『完全なる世界（コズモエンテレケイヤ）』はあまりにも静か過ぎるのを怪しく思っていた
「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなものだ」
「ジャック、稀にそうなのかもしれないがたいていは何か策や罠を敷いているものだ」
「んなもん、正面から叩き潰してやらぁ。」
「ふ、そうだな」
ハザマが罠かもしれないというがナギはいつものように返した。そ

こに一人の女性が現れた

「ナギ殿！帝国・連合アリアドネー混成部隊。準備完了しました」

「おう」

部隊の準備完了を知らせたのはまるで天使や女神を連想させる白い翼をもった堅牢な鎧に

身を包んだ先ほどの部隊の隊長であるセラスである。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺たちが本丸に突入できる。頼んだぜ」

決戦の作戦内容は単純明快でアリアドネー部隊が自動人形や召喚魔・・・・いわば雑兵に

当たる数の多いが弱い敵を引き付け。ナギたち『紅き翼（アラルブラ）』が敵の本陣に乗り込んで

大将格を討つ。少数精鋭の一騎駆けである

「ハッ。それで・・・・・あの、ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか？」

実は彼女はナギのファンであった

「おあ？ああ、いいぜ。それくらい」

「尊敬していました」

そんな決戦前とは思えないほのぼのとした空気がながれたがガトウからの連絡が入り

「皆か、報告だ。連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう

決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私たちでやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「彼らはもう始めています・・・・・・・『世界を無に帰す儀式』を。世界の鍵『黄昏の姫御子』は

今、彼らの手にあるのです。」

「『黄昏の姫御子』を使ってどうやって帰すかはわからんがとにかく行くしかないようだな、ナギ」

「ああ。そうだな、ハザマ。」

そしてナギが杖を取り、皆に開戦を告げる

「よぉし、野郎ども！！！これが最後の戦いだ！！行くぜ！！！！」

「「「「「「おう（ああ）！！！」」」」」」

皆が走り出す。『紅き翼（アラルブラ）』が先に飛び。その後にアリアドネー部隊や戦艦が列を成し、敵のいる「墓守り人の宮殿」に向かっていく。

「ナギ殿！！敵が出てきました！」

先ほどのアリアドネー部隊の隊長が報告する

「そうか！なら、あいつらの足止めを頼んだぞ！」

「了解！」

ーーーーードゴォォォン！！！ーーーーーー

どちらが攻撃したかはわからないが、その音を皮切りに天使のような翼を持った鎧を着た兵士たちが

散開し、出てきた敵と戦っていく

「皆。一気に敵の本陣に突入するぜぇ！」

そして敵の召喚魔や自動人形たちが『紅き翼（アラルブラ）』の邪魔をしようとするがナギたちによって

悉（ことごと）く倒されていく。いくら召喚魔や自動人形の性能が良くても精鋭であるナギたちには

到底及ばない為だ。そして順調にナギたち『紅き翼（アラルブラ）』は「墓守り人の宮殿」に突入していく

宮殿内には外とはまったく違って、召喚魔や自動人形たちは影どころか気配すらなく、代わりに

罠が大量に配置されていたのだが、ここまで来た『紅き翼（アラルブラ）』には通用はずがなかった

そして順調に進み。最深部直前にて

「やあ、『千の呪文の男』　また会ったね。これで何度目だい？」

現れたのはそう、マクギル元老院議員を殺害してなりすましてナギ

たちを騙し陥れた

白髪の青年だった。先ほどの「何度目」なのはこの戦いに至る前の『紅き翼（アラルブラ）』が

敵基地に進行した時に何度も出会い。そして戦ってきたのだ

「僕たちもこの半年で君たちに随分数を減らされてしまったよ。だからここで・・・」

ーーーーザンッ！ーーーーー

白髪の青年の周りに幹部らしき五人の敵が現れる。どれもこの半年の戦いで戦った強敵たちだ

「この辺りでケリにしよう」

その言葉とともにナギたちや白髪の少年たちが一斉に散開し、それぞれの一体一に持ち込んでいった

そして各々が散開して一対一での戦いに持ち込むことになり
それぞれが激しい戦いを繰り広げている中でもっとも激しいのが
ナギと白髪の青年の対決だ。
あの元老院議員からの因縁の決着をつける為に戦っていた
ナギは頬に傷を負ったまま、背後に数十本もの雷の槍を展開し、白髪の少年に向かって飛んでいく

ーーーードドドドドドドドドドドドドドドドドド！！！！！ーーーーー

が白髪の青年には当たらなかった。そして

「あああああ！！」

「くぅあああ！！」

ーーーーードッ！！！！！ーーーーー

白髪の少年もなぜか片目だけ涙を流しながら自身の何倍もの石の槍・・・・いや、もはや
槍とはいえないほど巨大な岩を周囲すらも破壊しながら出て、敵を

喰らわんと進んでいくが

「くっ！」

瞬動で後退しながら杖を構え、迫り来る岩を破壊する為の呪文を口にする

「来れ（ケノーティス・）、虚空の雷（アストラプサトー・）、薙ぎ払え（デ・テメトー）」

ーーーーーゴゴゴゴゴ！ーーーーーー

巨大な岩がだんだんとナギに向かって迫り来る。そしてナギまであと少しのところで呪文が完成する

「雷の斧（ディオス・テュコス）！！！」

ーーーーーガゴォォォォン！ーーーーーー

ナギから放たれた雷の斧が巨大な石を切断・・・・・いや、粉砕したが

「ぐうぅ！」

その破片がナギの頬を更に切った

だがそんなもの構わずに先ほどの石煙の向こうにいるだろう白髪の

青年を睨む。

そして白髪の青年がなにもせずにそこに佇んでいた・・・

「　地の底に眠る（タルタローイ・ケイメノン・）　死者の宮殿（バシレイオン・ネクローン）よ　」

二人とも動かずにいるが、そもそも今唱えている呪文は彼らならば近接戦闘を行いながら

詠唱ができるはず、だがそれをしない。彼らはただその魔法に専念する。

しかも彼らは最上級の魔法使い。そのことによりそこから生み出される魔法の威力は

もはや筆舌にすることができないものであるだろう。

「百重千重と重なりて（ヘカトンタキス・カイ・キーリアキス・）、　走れよ稲妻（アストラプサトー）。」

「我らの下に姿を現せ（ファインサストー・ヘーミン）」

そして二人の因縁の対決に決着をつけるために二人は同時に詠唱を終え、最大の魔法の名を紡ぐ

「冥府の（ホ・モノリートストヤオトゼドゥ）　石柱！」

ーーーーーゴォォゥゥゥンーーーーーー

白髪の青年の頭上には・・・・・・もはや、「搭」と称してもいいほどの巨大すぎる柱

・・・・・・いや、正確には正六角柱の形をした灰色の大理石で構成されている。

それはともかく、それほどまでに大きかった。それにそれから感じられる魔力から

持てる魔力を全てこの一つに注いでいると容易に推測できた

その一つに掛けたからこそ通常では想像できないほどの強度と質量を持つにいたったのだろう。

対するナギも・・・・・・

「千の雷(キーリプル・アストラベー)!!!」

ーーーーードンッーーーーー

ナギが振りかぶった腕を振り落とし。振った腕の先から

まさに呪文の一部を体現したような百重、千重もの重なりし雷(いかずち)が現れ、産声のような音を出す

それは自然界での雷(いかずち)を凌駕しうる威力を持っていた

そしてその雷(いかずち)は現れた岩の搭を喰らうためにその牙をもって進み・・・・

ーーーーーーーーーーバギィィギャガガガガガガガガガガ！！！！！ーーーーーーーーーーーー

雷(いかずち)と石の搭がぶつかり。そして、互いが相手を喰らわんと牙を向ける

雷(いかずち)は内に秘めた破壊を、石の搭はその身の威力を・・・

そして大音量の削りあいを起こした。

勝負は雷(いかずち)は破壊しきれば、搭は耐え切れば勝ちだとゆう、極々単純な戦いだ。

だが規模は桁違いではあるが・・・・・

ーーーーガガガガガガガガガガーーーーー

ナギの放った『千の雷』が白髪の青年が放った『冥府の石柱』を表面から削り取っていく

綺麗な形をしていた搭の先端は最早見る影のないほどボロボロになっていく

だが普通ならば融解してもおかしくないほどの熱量をもっている雷(いかずち)とぶつかっていて

それでもなお固体のままでいるのは見た目と反した硬度と質量のためなのであろう

ーーーーガガガガガガガガガガガガーーーーー

だんだんと石の搭が白く発光していく・・・・・おそらく石の中の溜まりに溜まった熱が

限界を超えて発光しているのだろう。

ーーーーゴゴゴゴゴゴゴゴーーーーー

そして石の搭が全て白く白く光っている。その様子からあと少しで決着が付くだろうと推測できた

搭が限界であるようにまた、雷(いかずち)の方も搭を破壊しきれずにだんだんと威力が

弱まっていく。

その魔法を互いに撃った二人も

「あああああああああああああっ！！！！！！！」

「くぅぅあああああああああああああ！！！！！！！」

ーーーーーゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！ーーーーーー

敵を打倒するため魔法に更なる魔力を注ぐ

ーーーーギギギギギギギギギギギギギギーーーー

爆発した・・・・・・・いや、正確には破裂したと表現した方が正しいのかもしれない

本当に一瞬だけ巨大な音と極光を発したのだ。

周囲への影響がこれだけなのだからいかにあの一点へ力が集中していたのだろう。

その少し後に余波の熱風が吹いてきたが別に体感的にはかなり熱くは感じられるが実際には

何の問題もない程度だった。

結局のところ、引き分けだ。しかしナギは・・・・・・

「おおおおおおおお!!!」

ーーーーーダッ!!ーーーーー

白髪の青年へ全速力で瞬動で駆け、攻撃を仕掛けにきた。

白髪の青年は先ほどの『冥府の石柱』に全てを掛けるぐらいに力を注いだ為に反応が遅れたのだ。

だが白髪の青年も『完全なる世界（コズモエンテレケイヤ）』の最高幹部である。

反応が遅れたとしてもノータイム・・・一瞬で石の魔法の射手（サギタ・マギカ）など出せるだろう

ただ、制限として一つくらいしか出せないのが難点なのだが。

ナギに向けて咄嗟に撃つが・・・・・・

「グゥッ！」

杖を持った左手に当たるがたいした傷は与えられず。

「はあああ！」

ーーーーガシィ！ーーーーー

ナギは杖を持っていない右手で白髪の青年の首を掴み、そのまま瞬動の慣性に跳躍を加え、

そして・・・・・・・

ーーーーードガァッ！ーーーーーー

そのまま重力とあるだけの力を込め、石の床に地面が少し陥没するほど叩き付けた。

「ゴフッ・・・」

そしてそれの叩きつけがの戦いの因縁をつける決め手に成りえたようだった。

だがナギはその手を放なすどころか、そのまま白髪の青年を持ち上げて

「黄昏の姫御子は・・・・・・どこだ？消える前に吐け」

ーーーーーｓｉｄｅナギーーーーー

「見事・・・・・・理不尽までの強さだ。」

白髪の青年は目の前に敵へ自分を倒したことへの敬意を表していたが

「黄昏の姫御子は・・・・・どこだ?消える前に吐け」

俺はそれよりも重要なことを吐かせようとあいつの首を持った腕を更に力を込めるが・・・

「フ・・・フフフ・・・・・まさか君はいまだに僕が全ての黒幕だと思っているのかい?」

「なん・・・だと?」

あいつの口から出たのは自分が『黒幕』ではなく、あいつほどの力をもってしてもまだ『幹部』

であることだった。俺がその事に驚愕を表しているとその直後に・・・

ーーーーーバスッーーーーー

そんな音と共にあいつごと俺はなにかに撃たれた。

ーーーーーハザマｓｉｄｅーーーーー

「ナギッ！！」

自分たちがそれぞれの敵と決着を付けナギと合流しようした時、突然ナギが撃たれたのだ。

白髪の青年ごとナギが撃たれて倒れていくのをジャックたちが駆ける中

私は撃った方向を見て、そこにいたナギを撃ったであろう人物を見つけ警戒した。

狙撃された仲間を助けようとした仲間が狙撃されることはよくある話だからだ。

そして闇すら通り越すような黒のローブを全身に纏った男を感じた・

・・・いや、理解した

彼はおそらく、「世界」と同じかそれに順ずるもの・・・・・

そしてそこから出るものがいかに恐ろしさを自身が知っているからこそ・・・・

だからこそ私は自然とある呪文を口にしていた

「第零式拘束機関解放！　次元干渉　虚数方陣展開！

固有境界に接続！」

自身が持つ障壁の最強の・・・・山を更地に変えるほどの攻撃すら防ぐ障壁を展開する

「ツクヨミユニット　起動！」

ーーーーーヴォンーーーーー

ハザマの目の前に黄色に光る巨大な紋章が現れた。その直後に・・・・・・

ーーーーードッ！！！！ーーーーー

とてつもない衝撃がツクヨミユニットに襲ってきた。

おそらく相手もツクヨミユニットを感知して放った一撃だったのであろう。

「ハザマッ！！」

その余波で全員が襲撃に気づいた。

「グ・・グゥォォォ」

ーーーーーバチッ・・バチィーーーーー

だんだんとツクヨミユニットが押されていく。

それがその攻撃の威力の凄まじさを物語っていた。

「オオオオオオ！！」

だがハザマも後ろにいる仲間を守る為に負けずにさらに力を注ぐ

ーーーーーバチバチバチバチ！ーーーーー

そのおかげかツクヨミユニットは押し返し、均衡状態に持ち込んでいった。

そして敵の攻撃との鍔迫り合いが進んだあと限界を迎え・・・・・

ーーーーーパァンーーーーーー

ツクヨミユニットと敵の攻撃が同時に消えた。だが結果は引き分けではなかった

攻撃は防ぎきることはできたがツクヨミユニットが壊れた反動で・・・

「ゴフッ」

「ハザマ！！」

私は吹き飛ばされてしまったのだった。

ーーーーードシャァァーーーーー

そして瓦礫の中に突っ込んでしまいそのまま埋まってしまったようだ。

そのせいで周りが見えなくなり、かろうじて音が聞こえてくるくらいだ。

それに此処から抜け出すには少々時間がかかる様だ。

「次が来ます！！」

ッ！！まだくるか！！だが自身は埋まっていてどうすることもできないから

ジャックたちに任すしかない。

「気合防御！！」

「最強防護（クラティステー・アイギス）！！」

ーーーーードッ！ーーーーー

「ぬうううぅ！！」

ジャックたちが必死に防ごうとしているのが解る声を聞きが・・・・・・

ーーーーーボキュ！・・・・・ドウッ！！！！！！ーーーーー

・・・

がひとの形を
しているのだ。そしてそれであった経験があるからこそあれの理不尽さが解る。
まさか最後にこんなものがでてくるとはな・・・・・
と自身でも信じられないくらいにあっさりとあきらめていた。
だが・・・・・・・
「待てコラてめぇっ！！」
ジャックはおそらく傷つきながらもそれでも対抗しようと声を張り上げる所から
「任せな。ジャック」
ーーーーーザンッーーーーー
そんな風に聞こえそうな足跡と共にナギが立ち上がったのだ。
「い・・・いけません、ナギ！！　その身体では！」
アルビレオがそう叫んだ。あの時の白髪の青年ごと打たれたはずだから重傷だろう
後から聞くには実際にナギは重傷といっても過言ではないくらい傷

を負っていた
特に右肩は撃ち貫かれていて、その傷から流れた血で右腕は真っ赤に染まっているほどだ。
だがナギはそんなものかまわずに
「アル、お前の残りの魔力全部で俺の傷を治せ」
アルビレオに傷を治すように頼んだ。
「し、しかしそんな無茶な治癒ではっ！」
そう、いくらなんでもナギは重傷を負っているのである。いくら治癒の魔法をもってしても
そう簡単には治せはしない。
「３０分もてば充分だ。」
「ですがっ！！！」
「ふふ、よかろう。　ワシも行くぞ。ナギ。」
ナギと同じようにゼクトも起き上がった。
「ワシが一番傷が浅い。」
「お師匠・・・・・」

「ゼクト！！　たった二人では無理です！！」

「ここでやつを止めなければ世界が無に帰(き)すのじゃ。無理でも行くしかなかろう」

「ナギ、待て！！　奴はマズイ！！　奴は別物だ！！」

「死ぬぞっ！　体制を建て直してだな・・・・」

ジャックもあれの危険を理解したのかナギにそれでは無理だと言っている

だが・・・・・・・

「バーカ。　んなコトしていたら間に合わねぇよ。らしくねぇな。ジャック」

ナギは振り向き

「俺は無敵の『千の呪文の男(サウザンドマスター)』だぜ？」

と言い切った。

「俺は勝つ！！！　任せとけ！！！」

そしてナギたちはあれに向かっていった・・・・・

ふっ・・・・そうだったな。簡単に諦めてしまっていたようだ。

あれを誰よりも理解していたからこそあっさりとあきらめてしまったのだろう。

自身にはそれと同等の武装を持っているのにもかかわらずに。

ナギはそんなものもっていないことにかかわらずにあれに立ち向かっていった。

たとえ遥かに格上だろうと構わずに立ち向かうことを忘れていたようだ。

ナギの話を聞いて自分も立ち向かおうと決めた

私は体を動かして今まで埋まっていた瓦礫から抜け出す。

さっきまで違い、まるで重みを感じていたのが嘘みたいに軽かった。

それとハクメンの鎧は先のツクヨミユニットの反動でひしゃげてしまった。仮面も砕けた。

一ヶ月以上の時間はかかるが完全修復は可能だから心配はない。

そして服を変える。変えた服はラグナ＝ザ＝ブラッドエッジの服に変更する。

黒字の布に白い線が入ったインナーにそれと同じような黒い袴。そしてその上から

真紅のジャケットを羽織り。自前の白髪が映える服だ。

そのまま瓦礫を押しのけて起き上がる。

ガラガラと音を立てたのでその場に残っていた仲間がこっちに気づいた。

だがアルビレオが倒れている詠春や両腕がないジャックの前に出て警戒している。

それもそうだ、突然瓦礫から知らない奴が出てきたからだ。

追加であっちは全員満身創痍どころか、ろくなことすら出来ない状態だ。

これで警戒しないほうがおかしいだろう。

そしてアルビレオは私が攻撃せずにいることを不思議に思い、そし

てあの最初の攻撃で
瓦礫に吹っ飛ばされた私を思い出して恐る恐るたずねる。
「えっ？・・・・・・・・・まさか、あなたはハザマなのですか？」
「ああ、そうだ。ハザマだ。・・・・・もっともさっきの攻撃で装備と仮面が壊れてしまった。
それにジャックたちなら見せてもいい、と思ったので仮面をはずした。
これが本当の素顔だ。テルミの時のような変装ではないぞ。」
そう服などについている埃などを払いながら本当の素顔であるで伝えるとアルビレオたちは
驚いていた。
「そうですか・・・・それが貴方の素顔でしたか。怪我のほうは・・・・・・・・・
見る限りだと無事のようですね。」
「ああ。都合よく鎧だけで済んだのだからな。その後の埋もれた瓦礫から抜け出すのに
時間がかかってしまった。」

「ならば・・・・あなたに頼みたいことが「ナギたちの手助けだろ？」ええ、そうです。」

「埋まっていても声は聞こえていたからな。あれに向かっていったナギたちを助けにいかんとな。」

「そうですか。・・・・悔しいですが今の私たちには戦える余力は残っていません。」

「わかった。アルビレオは詠春たちを頼む。」

「ええ。わかりました。」

「まて、ハザマ。」

そこで肘から先がない腕を包帯で巻いたジャックがたずねてきた

「どうした？ジャック。」

「あれとやれるのか？　俺は一目見たとき『あれはヤバイ』と感じた。

それこそ絶対に勝てないと思っていたくらいだ。ハザマ・・・・それでも行くのか？」

「ああ・・・・・・・それに私が持っている術式には・・・・・・・・・・・・

使わないと思っていたが『神殺しの剣』と呼ばれる禁忌のものの封印を解く。」

「「神殺し！！？？」」

「そうだ、ジャックたちの『神』と違うかもしれないがこいつはある定義によって定められた

『神』を消す・・・・いや殺すための剣だ。あれにはどれほど効くかはわからないが

確実に効果はあるはずだ。」

「そんなものをあなたはもっていたのですか。失礼だが正直私はそれを持っているとしても

勝てるとは思えないのですが・・・・・ナギたちを頼みます。」

「俺もだ・・・・・・」

「ああ、わかった！」

そしておれはナギたちが戦っている戦場へと駆けた。

そしてナギたちの元へ駆けるなか右手を顔の前に掲げ、ある呪文を紡ぐ

あの世界では最強とまで言われた魔道書の起動するために言霊(ことだま)だ

「第六六六拘束機関解放(だいろくろくろくこうそくきかんかいほう)」

その言葉に反応するかのように手の甲についていたまるで蓋のようなものが開く

それはまるで瞼(まぶた)を開いたように。そこから幾条もの紅き線が手や腕に広がる

「次元干渉虚数方陣展開(じげんかんしょうきょすうほうじんてんかい)」

そして開いた手の甲からあれとは違う黒い闇が出てくる。その闇が腕に纏わり

腕が変化していく

「イデア機関接続(きかんせつぞく)！」

腕がだんだんと変化していく。それに呼応するかのように腰に下げている大剣の刃が

まるで血のような真紅で金属が炉に入れられた時のような光を点滅しながら放っていく。

そして

「『蒼の魔道書(ブレイブルー)』　起動！」

手の甲の蓋から蒼い珠が瞬(またた)くように煌(きら)めき。そして闇に覆われた腕の指先が

蒼いゆらめきを帯び。闇が固定され蒼く、そして禍禍しい爪に幾条もの蒼の線が走る漆黒の腕が

姿を現した。そのまま先で戦っているであろうナギたちへと更に加速していった

一方ナギたちは造物主（ライフメイカー）（ナギたちはあれと呼んでいる）対峙しており、

造物主は幾何学的模様で構成された何十もの魔法陣を周囲に展開し、その一つ一つの真ん中に

ナギたちを消し去ることが出来るほどの魔力を込めた黒い弾丸が今すぐにでもナギたちへ

襲い掛かろうと唸っている。そして

――――ドッ！！――――

視界を埋めつく程の黒い光線がナギたちへと向かって一斉に放たれた。

「くっ！」

ナギはそれを防御するために腕を交差した直後に後ろから声が聞こえた

「カーネイジ！」

ナギの後ろから赤いジャケットを着た人物が現れ、逆手に持った大剣を最上段から振り落とす。

すると黒い光線が大剣によって切り裂かれ霧散した。
だがその後ろにも更なる黒い光線が向かってきた
彼はそれを予想したかのように逆手に持った大剣を順手に持ち直し、
そのまま先ほど振り下ろした
剣筋をなぞるように振り上げその勢いをそのまま背中から腰のほう
へ回し、もう片方の手をそえて
「シザァー！」
一気に振り上げる。そこか赤黒い棘が現れ、後続の黒い光線を吹き
飛ばした。
「大丈夫か？ナギ。」
その後にナギに話しかけるが
「さっきのは助かった。誰だ、アンタは？」
なんて聞かれました・・・・・・たしかにテルミの時声変えてたけ
ど（ＣＶ．中村悠一）
普段はハクメンの仮面で声がくぐもっていたかも知れないけど・・・
・・
完全に他人扱いって・・・・・・・少々傷つく。まあめげずに更に
来る攻撃をいなしながら

「ああ、素顔では初めてだったな。私だ。ハザマだ」

そのことにナギやゼクトもアルビレオたちと同じように驚いていた。

「無事だったのか！ハザマ！それが素顔か。おもったよりもワイルドな感じだな。」

だがこんなときでもナギはナギだった。

「おぬしも無事だったのか。だがその右手は何なのじゃ？もしかしてそれが素顔を隠す・・・・

には大げさすぎる気がするがな。」

「これか？これは違う。これはいわば禁呪クラスの術式だ。それもとっておきのな。」

「いけるのか、それは？」

「わからないが、やってみよう。ゼクト、援護を頼む！」

「わかった。」

そして一つの攻撃を防いだ後、私は背後に蒼と黄で彩られた直刀で片刀の刀の

フィンを八つ展開し、それを左手を天へ伸ばすように上げ。そのまま陣を描く。

それに追随するように八つのフィンも更に上空へ上がり陣を描き出す。

「神世七代！　神によりて作られし世界！　全ては偽り！　全ては虚像！」

その言葉によりフィンが描いた紋章陣から人二人分位はある巨大な剣の柄とそれを持つ手が現れ

手がそれを持ち一気に引き抜くとさらに巨大な蒼い刀身が現れた

「なんだそれは！？いや、その魔法はまさか！？」

造物主もあの刀身に秘められている物に気づき、それを阻止しようと

極大の黒い光線を出すがもはや遅い。剣を振りかぶり。

「終末は来たれり・・・・今、全てに　破壊を！」

ーーーーーゴッ！ーーーーーー

極大の光線ごと空気すらも切り裂き。造物主に斬撃がいく。

その途中に幾重もの障壁が邪魔をしようとしたが水を剣で切るようにあっさり斬られた。

そして造物主（ライフメイカー）に当り、後ろへ吹き飛ばされるが壁にはぶつからずに

「ぐうぅぅ」

途中で止まる。しかしフードに隠れて見えないが雰囲気と体の中心に横一文字の切り傷が

あることから確実に効いていると判った。

「ナギ。ゼクト。確実に奴に届いたみたいだ。」

「ああ。じゃがあれをもう一発いけるか？」

「さっきのあれは準備に時間が掛かりすぎる。もう一度やるとしたなら奴に警戒されてすぐに

潰されるだろう。だが問題ない。ほかに同じような手段がある。ナギたちもいけるか？」

「うむ」

「ああ。師匠。ハザマ。最終決戦第二ラウンド行くぜ！」

「「おう（ああ）！！」」

駆け出し。そして最終決戦が始まった

本編第六話　本当の強敵って意外な所で出てくるよね（後書き）

次回はまた作者のリアルの事情とかなんやらで遅くなってしまいます。

この作品を楽しみにしている方、すいませんでした。

出来る限り早めに投稿しようと頑張ってみますがそれでも時間がかかるとおもいますので

ご了承してください

感想なども待っています

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2410n/

世界の守護者？・・・・・いや修正者です

2010年11月28日22時39分発行